

当時の日記から見た日清戦争

岡崎 一

序論

日清戦争は宣戦布告前の明治27年7月25（または23）日に実質開始したが、開始日の解釈を巡っては当初から混乱があった。また、終結時期についても、諸説が存在する状況である（本稿では狭義に「日清講和条約が批准された」明治28年5月8日までとする）。戦争前後の動きも割愛しがたいので、実際には最後通牒（明治27年7月20日）前後から明治天皇還幸（明治28年5月30日）までを取り扱うが、そのため、明治28年8月1日に陸奥宗光が尾崎三良に語った“三国干涉、遼東還付ノ経路”——（“百部計”“極秘密ニ”出版され“知友ニ送”られたものの薩長政府に“忌マ”れ“絶版”・“没収”となった）“陸奥ニ取テ光暉アル履歴”『蹇々録』に“詳悉”されている（『尾崎三良日記』下巻74-75）——の記載などまでは充分に含められない。

それは兎も角、日清戦争は近代日本初の対外戦争であり、本稿はこの異常な時期に当時の日本人（および在日外国人）がどのように思考し行動していたのかを改めて検証する試みである。この結論が一見出ているような問題を敢えて取り上げるのは、当時の文献（具体的には日記）を調査する過程で、当時の人々が必ずしも好戦一色に染まっていたわけではないことが判明してきたからである。例えば樋口「一葉から『徒然草』の講義を受けた穴澤清次郎」が、“戦争熱に浮かされて”、“[戦争と文学]と云つた風な質問をした”時、一葉が「われわれ仲間では、少しも戦争なんて影響されませんね」と“毅然とした態度”で答えたという逸話（『樋口一葉全集』第3巻[上]403；「一葉さん」『一葉』[旧筑摩書房版全集月報]第2号）などは鮮やかな事例と言えよう。実際、“露のよ”（『樋口一葉全集』第4巻[上]323）という虚無的・無常観の人生観を持っていた一葉の日記には“戦況の進展については全く記録がなく、無関心なほどに冷静に見える”（第3巻[上]403；「一葉さん」）。（ただしこれは程度問題で、特に短歌「ふる郷にかさる錦はから衣よにかち色やきてかへるらん」・「つるきたち^(イ)牙し霜よの月かけもことし^(イ)はいかにの^(ロ)とけかるらん」[第3巻（下）689]が証明するように、一葉は実際には日清戦争に関心を持っていた。）因みに“戦争に熱狂したのは士族”や“知識人”で、“民衆の多くは、開戦動機のわかりにくいこともあって戦争そのものにたいして無関心であった。ジャーナリス

ト生方敏郎は「政府の事情も何も知らぬ地方民は、どうしてこの戦争が起ったかは容易に腑に落ちなかったであろう」と指摘している（『明治大正見聞史』）。長谷川如是閑も「そのころをいく回回想してみても、私たちが戦争にたいして深い関心をもっていたような覚えは全くない」と回想した（『ある心の自[叙]伝』）（藤村 108-09）。岡本綺堂も“いよゝ開戦となるまでは一般国民が割合に冷静——褒めていへば冷静だが、悪くいへば無関心の姿であつた”（3）と記している。

心理的一元化（好戦的態度）と、それからの逸脱（戦争に対して距離を置く態度）——この落差こそ本稿の注目するところであるが、本稿の関心事はこの落差の（多様な）原因を考察することよりも、この落差の諸相を明らかにすることにある。

この場合、有効な分析手段となるのが日記である。たとえ自己を賛美・弁護したり事実を誇張・歪曲・隠蔽している場合があるとしても、（正岡子規「陣中日記」のように最初から公表を意図したものは別として）本来公表を意図していない秘匿的性格のものだけに、日記には執筆者の表向き（粉飾）の顔とは異なる裏側（真実）の顔が覗いている。そこにこそ公的な日本近代史（本稿の場合には日清戦争期正史）ではなく、私的（非公式）故に真実の歴史が姿を現す。例えば明治27年8月16日に公布された軍事公債条例（勅令）を例に取ろう。この軍事公債募集は、当時日本銀行馬関（現在の下関）支店長だった高橋是清が、“恰度封建時代の軍用金を取立てるに彷彿たるものかあつた”（『高橋是清自傳』 479）と批判的に回想しているものだが、それは兎も角、この勅令のことは次のように『原敬日記』にも記載されている。

〔明治27年8月18日〕 軍事公債五千萬圓募集の勅令出づ、但差向三千萬圓を募集する事となし、利率も六厘までを許す事と規定せしも今回は五厘となせり。（第1巻219）

これに対して、明治27年11月25日に跡見花蹊は30円を出費し（『跡見花蹊日記』第2巻330）、依田学海は累積的に応募し遂には1万円もの額となり“や、家産の形を為”すに至っているほどである（『学海日録』明治27年12月14日、明治28年1月17日、明治28年6月25日）。このようなことは日記によって初めて知りうる貴重な史実と言えるが、このような共通項が他にもあるのかどうかを検証することも本稿の主眼の一つである。

本稿では、公表を意図した（あるいは当時既に公表されていた）日記は、紙幅の関係もあり、（前記の子規「陣中日記」を例外として）原則として取り扱わない。具体的に取り上げる日記の執筆者は、従軍者よりも銃後者の方が多い。その氏名（生没年、日清戦争開始時の年齢、戦時中の主な身分、主な居住地）、日清戦争期の日

記原題または使用日記版本名、公刊形態は、以下の通りである（著者名 50 音順）。

●跡見花溪（1840-1926 年、54 歳、跡見女学校校長、東京）『明治二十七年当用日記』（金原喜一、明治 26 年）[明治 27 年 1-12 月] 花溪日記編集委員会（編）『跡見花溪日記』第 2 巻（跡見学園、2005 年）

●池辺三山（1864-1912 年、30 歳、日本新聞社客員記者、パリ）「欧羅巴漫遊日記」（明治 27 年 8-10 月）日本近代文学館（編）『池辺三山（二）』文学者の日記 2（博文館新社、2002 年）※初出の『三山遺芳』（三山会、昭和 3 年）のテキストを参考資料として併載しており、これを本稿でも小活字で示した。

●石井十次（1865-1914 年、29 歳、岡山孤児院院長、岡山市）「明治二十七年 信仰之生涯」（明治 27 年 1-12 月）・「十次日誌」（明治 28 年 1-12 月）『石井十次日誌（明治二十七年）』・『石井十次日誌（明治二十八年）』（石井記念友愛社、1963-64 年）

●巖谷小波（1870-1933 年、24 歳、『京都日出新聞』主筆、京都市）「甲午日録」（明治 27 年 1-12 月）桑原三郎（監修）『巖谷小波日記』[皇朝三十七年] 翻刻と研究』白百合児童文化研究センター叢書（慶應義塾大学出版会、1998 年）

●上田貞次郎（1879-1940 年、15 歳、正則中学校学生、東京）「処世余録」第二―六冊（明治 27 年 11 月―明治 29 年 8 月）上田貞次郎日記刊行会（編）『上田貞次郎日記明治三十七年』（慶応通信、1965 年）

●内田魯庵（1868-1929 年、26 歳、作家・翻訳家、東京）「回想録資料ノ一」明治二十七年一月一―三月日記抄』（明治 27 年分）・「日記 自十月九日」（明治 27 年 10 月 9 日―12 月 31 日）・「日記」（明治 28 年分）野村喬（編）『内田魯庵全集』別巻（ゆまに書房、1987 年）

●尾崎三良（1842-1918 年、52 歳、貴族院勅選議員・法制局長官・錦鶏間祇候・法典調査会委員・宮中顧問官、東京）「日誌」伊藤隆・尾崎春盛（編）『尾崎三良日記』下巻（中央公論社、1992 年）

●勝海舟（1823-99 年、71 歳、枢密顧問官、東京）「海舟日記」第二十五号（明治 25 年 9 月―明治 31 年 12 月）勝部真長その他（編）『勝海舟全集』第 21 巻（勁草書房、1973 年）※以後、海舟の傍証に際して巻数不記の場合は、当書からの引用とする。

●亀井茲明（1861-96 年、33 歳、伯爵・第 1 師団従軍写真家、東京・遼東半島）「従軍日乗」亀井茲明『従軍日乗』（亀井茲常、1899 年）※「家扶」に筆録させ後日「考訂補輯」させてもいるので、通常の日記とは異なる。また写真機器修理のため一時帰国しているので、従軍日記としては一時中断。

●国木田独歩（1871-1908 年、22 歳、『国民新聞』[従軍]記者、東京・遼東半島）「欺かざるの記」第四―第七（明治 27 年 4 月―明治 29 年 5 月）国木田独歩全集編纂

委員会(編)『国木田独歩全集』第7巻(学習研究社、1965年)

●黒田清輝(1866-1924年、27歳、[従軍]洋画家、東京・遼東半島) 体裁不明
『黒田清輝日記』第2巻(中央公論美術出版、1967年)

●近衛篤磨(1863-1904年、30歳、貴族院議員・学習院院長、東京)「日誌」近
衛篤磨日記刊行会(編)『近衛篤磨日記』第1巻(鹿島研究所出版会、1968年)

●高瀬真卿(1855-1924年、38歳、東京感化院長、東京)「萩村日記 第五」(明
治27年5月-明治28年6月)・「萩村日記 第六」(明治28年6月-明治29年3月)
長沼友兄(編)『高瀬真卿日記』第2巻(淑徳大学アーカイブズ叢書2)(淑徳大学
アーカイブズ、2013年)

●田中正造(1841-1913年、52歳、衆議院議員、東京・栃木県)「日記」5冊 田
中正造全集編集会(編)『田中正造全集』第9巻(岩波書店、1977年)

●留岡幸助(1864-1934年、30歳、留学生、米国コンコード・ニューヨーク)「渡
米準備日記」(明治27年2-5月)・「滞米日記」(明治27年5月-明治29年5月)
留岡幸助日記編集委員会(編集)『留岡幸助日記』第1巻(矯正協会、1979年)

●原敬(1856-1921年、38歳、外務省通商局長、東京) 日記第九冊(明治25-28年)
原奎一郎(編)『原敬日記』第1巻(福村出版、1965年)

●樋口一葉(1872-96年、22歳、小説家、東京)「水の上日記」(明治27年6-7月)・
「水の上」(明治27年11月)・「水の上日記」(明治28年4-5月)・「水の上につ記」(明
治28年5月)・「ミつのうへ」(明治28年5月)・「水の上」(明治28年5-6月)・「水
のうへ日記」(明治28年10-11月) 塩田良平その他(編纂)『樋口一葉全集』第3
巻(上)(筑摩書房、1976年) ※以後、一葉の傍証に際して巻数不記の場合は、当書か
らの引用とする。なお、当書では、“草稿が冊子に書かれている場合、稿本の頁を表示するた
めに、カギ括弧()・丁番号・表裏の略号(オ・ウ)を本文中に施し”(「凡例」v) ているが、
読み易さという観点から、これらを本稿では省略した。

●正岡子規(1867-1902年、26歳、俳人・新聞『日本』[従軍]記者、東京)「陣中日記」
(『日本』明治28年4月28日、5月9・16日、7月23日) 正岡忠三郎(編集代表)
『子規全集』第12巻(講談社、1975年)

●南方熊楠(1867-1941年、27歳、留学生・大英博物館東洋図書目録編集係、英国
ロンドン) *Collins' Handy Diary, 1894* (London and Glasgow: Collins, 1893) [明治
27年1-12月]; *Charles Letts's Diary* (London: Letts, 1894) [明治28年1-12月] 長
谷川興蔵(校訂)『南方熊楠日記』第1巻(八坂書房、1987年)

●森嶋外(1862-1922年、32歳、[従軍]軍医・作家、東京・遼東半島・台湾「徂
征日記」(明治27年8月-明治28年10月) 木下左太郎その他(編輯)『嶋外全集』

第35巻(岩波書店、1975年)

●山本瀧之助(1873-1931年、20歳、小学校教員、広島県福山町)「明治二十七年録」(明治27年1-12月)・「明治二十八年録」(明治28年1-12月) 多仁照廣(編著)『山本瀧之助日記』第1巻(日本青年館、1985年)

●依田学海(1834-1909年、60歳、漢学者・作家、東京)「学海日録四十」(明治27年1-10月)・「学海日録四一」(明治27年10月-明治29年10月) 学海日録研究会(編纂)『学海日録』第9-10巻(岩波書店、1991年)

在日外国人

●ニコライ[Nikolai、本名はI. D. Kasatkin](1836-1912年、57歳、日本ハリストス正教会主教、東京)「日記」中村健之介(監修)『宣教師ニコライの全日記』第3-4巻(教文館、2007年)

●ベルツ[Erwin von Bälz](1849-1913年、45歳、帝国大学医科大学内科学教師、東京) *Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan* トク・ベルツ(編)・菅沼竜太郎(訳)『ベルツの日記(上)』岩波文庫(岩波書店、1979年)

序でに、直接役立った参考文献は、以下の通りである(著者名50音順)。

1. 研究書

(1) 日清戦争関係

- 大谷正『近代日本の対外宣伝』(研文出版、1994年)
- 大谷正『日清戦争 近代日本初の対外戦争の実像』中公新書2270(中央公論新社、2014年)
- 中塚明『日清戦争の研究』(青木書店、1968年)
- 原田敬一『日清戦争』戦争の日本史19(吉川弘文館、2008年)
- 藤村道生『日清戦争 一東アジア近代史の転換点一』岩波新書(青版)880(岩波書店、1973年)

(2) 日清戦争以外

- 長沼友兄『近代日本の感化事業のさががけ——高瀬真卿と東京感化院——』淑徳選書1(淑徳大学 長谷川弘教文化研究所、2011年)

2. 研究書以外

(1) 個人作品

- 岡本綺堂『随筆 思ひ出草』(相模書房、1937年)
- 尾崎行雄(尾崎罌堂全集編纂委員会編)『尾崎罌堂全集』第4巻(公論社、1955年)
- 勝海舟(勝部真長その他編)『勝海舟全集』第14巻(勁草書房、1974年)
- 亀井茲明『明治二十七八年戦役写真帖』上・下巻(亀井茲常、1897年) ※項目は上・

下巻の通し番号になっており、上巻は第一から第七十四まで、下巻は第七十五から第五百十まで。

- 陸羯南（西田長寿・植手通有編輯）『陸羯南全集』第4-5巻（みすず書房、1970年）
- 高橋是清（上塚司 手記）『高橋是清自傳』（千倉書房、1936年）
- 樋口一葉（塩田良平その他編纂）『樋口一葉全集』第3巻（下）（筑摩書房、1978年）・第4巻（上）（筑摩書房、1981年）

（2）新聞（写真復刻版は省略）

- 内川芳美・松島栄一（監修）『明治ニュース事典』第5巻（毎日コミュニケーションズ、1985年）
- 中山泰昌（編集代表）『豊明治編年史』第9巻再版（財政経済学会、1970年）

凡例・断り書き

紙幅の関係から、原則として図版は省略し、日記自体（とその引用）も、網羅ではなく取捨選択した。日記の記載中、印象的な箇所や（日記執筆者にとって）特徴的な箇所を優先的に引用したが、戦闘関係（特に戦況を丹念に記載している亀井『従軍日報』と依田『学海日録』）については適宜摘録・省略して引用した。台湾関係は省略した。

日記からの引用を徹底して時系列的に並べれば、同日の記載同士の比較が容易になり、それなりに興味深い発見も得易くなるわけだが、項目（章・節）別に分け、更に取捨選択も行なったため、その分、同日の記載同士の比較が容易ではなくなっている。それでも同日の記載同士の比較が少しでもできるように、引用には配慮した。同日の記載は、従軍者→銃後者→在日外国人の順序で引用した。

日記からの引用は、当日の記載を全て網羅したわけではなく、原則として関係個所に限定したため、〈前略〉・〈後略〉を必ずしも明示していない。当日の引用は、〔該当（年）月日〕（必ずしも記載日とは限らない）、日記本文、傍証（日記執筆者の姓、〔既刊日記の巻・号数または該当年〕、ページ）の順である。必要に応じて、※（註釈・論評）を付した。

日記のレイアウト（分かち書き・スペース空けなど）には、必ずしも従わ（または従え）なかった場合もある。

旧字体（旧漢字・変体仮名・合字など）は、原則として新字体に改めた。ルビは、パラルビとした。漢数字は、（差し支えない限り）原則としてアラビア数字に改めた。〈ページ〉（頁、p. および pp.）自体の記載は省き、数字のみで記載した。

誤植・脱落などは、[]で補訂した（ママという校訂は、なるべく避けるようにした）。

校訂が不十分・不適當あるいは誤っている場合さえあるが、それを一々指摘するのは煩瑣になるので、特に断ることなく直接的に改訂した。

当該年（明治27年か明治28年）が自明の場合には、〈年〉表記を省略したことがある。

共通事項（主に戦況）の引用記載については、利用メディア（主に新聞）の違い（例えば依田学海は『国会』・『東京朝日新聞』・『国民新聞』、山本瀧之助は『日本』、上田貞次郎は『時事新報』他）を考慮する必要があるが、（紙幅の関係もあり）本稿では引用記載の比較（異同の検討）までは原則として行ない得なかった。

第1章 朝鮮関連

宣戦布告までの経緯を前もって略記する。

明治27年7月20日、駐朝公使の大島圭介が朝鮮政府に対して清国との宗属関係破棄などを要求する最後通牒を発する（回答期限は22日）。

7月23日、日本軍が朝鮮王宮を占領し、国王の高宗を手中にする。そして日本側の圧力により、大院君が国政総裁に就任。

7月25日、大院君が清との宗藩関係解消を宣言し、大島に牙山の清軍掃討を依頼。同日、日本艦隊が豊島沖で清軍艦と交戦し（豊島沖海戦）、防護巡洋艦「浪速」（艦長は東郷平八郎大佐）が清兵を載せた英国籍輸送船「高陞号」を撃沈（「高陞号」事件）。

7月29日、牙山に向った日本軍（大島混成旅団）が清軍と交戦し、勝利（成歙の戦い）。

第1節 宣戦布告

8月1日、日清両国は互いに宣戦布告した。このことは、諸日記に次のように記載されている。

〔8月1日〕 清国に対し開戦の詔勅発表せらる。（原 219）

〔8月3日〕 三十年間に於て養成したる経験的文明を東洋に布かんがための天父の御摂理なる此度の戦……之れ天父が好んでなさせ玉ふところにあらずして激流の岩に進るが如き而已（石井 明治27年209） ※クリスチャン内村鑑三の有名な義戦論（「日清戦争の義（訳文）」『国民之友』第234号〔明治27年9月3日〕「特別寄書」欄）とも通じ合うものがある。因みに内村も〈摂理〉という言葉を用いている。

〔8月3日〕 是日、清国と宣戦の詔をよむ。（頭欄）「宣戦詔を發せらる」（依田 第9巻370）

[8月4日] 車中夕版ノ新聞紙ヲ読ミテ清帝李鴻章ガ日本ニ一着〈籌〉ヲ輸セシヲ責メ其勲章ヲ褫ヒタルノ報ヲ見ル。

「聞説天皇討満清 西来羽報最関情 有人如何風雲変 只謂書生不識兵」
此程ヨリ毎日ノ新聞紙ニ日清ノ戦報ヲ載セザルハ无シ (池辺 225)
車中夕版の新聞紙を読み、清帝、李鴻章が日本に一着を輸せしを責め、其勲章を褫ひたるの報を見る。

聞説天皇討満清、東来羽報最関情。憂心欲問風雲変。誰謂書生不識兵。
この程より毎日の新聞紙に日清の戦報を載せざるはなし。(池辺 226)

[8月5日] ○日本国の決心、決心に小決心、大決心。／朝鮮に戦ふよりは一直北京を陥るにあり。朝鮮独立を保たんもの先づ兵を京城に入れ云々。／此目的を達するは頗る果斷神速大度一致を要すと雖も、小は大に敵すべからず。胆を大ならしむ、心を大ならしむ、愛国心を。／戦の持永、実業交易法、姑息平和を止め、朝鮮取るべからず、又永く世話するの義あり。／支那事情政治行届かず、支は痛癒易し。／人民諸会社組合に自衛に富む。国家的結合弱し。／然るに他に戦ふものは先づ克く内を治めよ。／[中略]／○弊政革新は頭ま別つなり。／[中略]／東洋の大平和を旨とすべし。／政府たとひ下策に出づる事ありとするも予は為国家官民の一致を図るものなり。／何おか下策と云ふ、妄りに大兵を動せしは不同意なり。大兵を動かさばなぜ直に開戦せざる、直に決せざるは虚勢のために大兵海外に出したり。今に及んで四十日経過して漸く戦を開けり。而て直に支那を討つを以て上策とせり。之不同意なり。然れども此不同意を以て上下官民の一致を害ふものにはあらざるなり。○朝鮮の事少々。／秀吉のとき七年焦土。／今度も朝鮮戦争不可。

[中略]

○末路の政府俄かに大軍に依頼。楠氏、北條、長州征伐、今度／○日本支那の保存法。剣不、孔子の教形。日本魂。有形には家屋の事、船舶の事。／[中略]／腕力の戦は感情強く道理の戦は感情弱し。／日清に怒らば解散に怒れ。／支那兵と日本兵と一人交換に思ふべからず。彼れは盗賊無頼の徒なり、我れは良家の子弟なり。／[中略]

一、小細工、対外交戦国内に明かにせず。

一、北京を陥れん先北洋館⁽⁶⁾を討ち沈め。只茲にこまるは支十人と日本一人。(田中 413-16) ※記載が断片的なため、誤解を招きかねないが、“対外交戦国内に明かにせず”という政府批判と“支那兵と日本兵と一人交換に思ふべからず。彼れは盗賊無頼の徒なり、我れは良家の子弟なり。”という差別的日清兵比較論は明確。“日清戦争中

の日本軍と朝鮮人民・中国人民との関係が実際にどのようなものであり、日本軍がどのような矛盾に逢着したかが明らかにされず、そのうえ日本軍とたたかった清国軍がどのような歴史的な性格の軍隊であったかも明らかにされないまま、もっぱら日本軍の連戦連勝だけが喧伝されることによって、朝鮮人や中国人にたいするあやまった蔑視感が日本人のあいだにひろめられ”（中塚 218）たが、田中もその例に漏れなかった。

〔8月9日〕 倫敦伊東祐侃英国新聞ノ日清戦報ヲ載セタル者ヲ送り來ル 其ハ余ノ曩ニ英国ニ乞ヒタルニ応ジタル也。

此夜一箇ヲ裁シテ之ヲ伊東君ニ謝ス 且ツ一絶ヲ添ユ左ノ如シ

「万里東天飛戰塵 我兵何日破天津 中宮英使四隣駭 慷慨聞鶏蹴挫人」
（池辺 234）

〔8月11日〕 夜ホテルノ食堂ニ在リ 一老人ノ疎服鄙俚ナルガ入り来リ帽子ヲ脱セズ礼ヲ施サズ突然トシテ余ニ話セントス。其操ル所ハ独逸語ナリ

余一辞ヲ解スル能ハズ 此老人乃チ英語ヲ以テ操ル 余其話ノ日清戦争ニ係ルコトヲ解セリト雖余ノ英語ハ全ク迂拙ニシテ充分ニ対シ答フベキ力無シ 侯〔細川護成〕乃チ是ニ答フ

老人大ニ喜ビ刺ヲ懷ニ索リ取出シテ侯ニ捧グ 之ヲ見レバ則チ英国ウエールス地方某市ニ在任セル独帝国領事ダーン氏ナル者也

曰ク「日本必ズ清ニ勝ツ可シ。」侯曰ク「余誠ニ之ヲ祈ル」ト。（池辺 236-37）

〔8月12日〕 今井海軍大尉座ニ陪ス 細川侯ノ伯林ヨリ此ニ来リ賜ヘルヲ聞キ直チニ日清戦報ノ伯林公使館ニ達セルヲ聴カズヤト問フ。余伯林公使館書記吉田ヨリ聞キシ所ヲ以テ話タルニ大尉ハ曰ク「今朝此地ノ新聞ニハ我海軍威海衛ヲ攻メテ取ルコト能ハズ 陸軍兵万余釜山ト元山トニ上陸スト見ヘタレ共其実否如何ヲ知ラズ云々」ト言フ

東方ノ戦報ニ耳ヲ傾クルハ誰シモ同じ心也 去レド身武官職ニ在ル者ハ亦タ格別ナラザルヲ得ズ（池辺 238）

今井海軍大尉座に陪す、侯の伯林より此に來り玉へるを聞きて、直に日清戦報の伯林公使館に達せるを聞かずと問ふ。余吉田書記官より聞きし処を話したるに、大尉曰く、今朝此地の新聞には我海軍威海衛を攻めて取ること能はず、陸兵万余釜山と元山とに上陸すと見へたれども其の実否如何を知らずと、東方の戦報に耳を傾くるは誰れしも同じ心なり。去れど身武官職にあるものは又格別ならざるを得ず、〔後略〕（池辺 241）

〔8月18日〕 食後話往々日清戦争ノ事ニ及ビ曰ク「日本ノ戦功ヲ祝シテ一杯ヲ挙ゲン」ト二人〔ストックホルムの水道技師と銀行家〕ガ云エバ細川侯ト余ト偕ニ喜ンデ杯ヲ挙ゲタリ

[中略]

茲ハ日本人ノ足跡多カラヌ地ナレバ誰モ我一行ヲ珍客視セルノミナラズ目下日清戦争ノ事実日日各国ノ新聞紙ニ記載セラルル折ナレバ殊ニ目ヲ日本人ニ賤ゲリ 注意セルモノ勿論ナリト思フ (池辺 258-59)

[8月18日] 嗚呼日清の間に戦争は起りぬ。／東洋に於ける二大国民は殆ど生死の衝突を始めたり。／血を異境の土神に供する兵士あり。涙を茅屋の隅に呑む寡婦あり。嗚呼戦争は開かれたり。(国木田 191) ※「寡婦」については、菱田春草の物語を醸した(が校長の岡倉天心の裁定で最優等となった)東京美術学校卒業制作《寡婦と孤児》(明治28年)が直ちに連想される。

[8月23日] 食後談話十時ニ至リ此日此国〔ロシア〕ノ官報ニ曰ク日清戦争ノ報知ヲ載セ陸海共ニ日本利アラズトノ報アリシト聞ク 一勝一敗一喜一憂 (池辺 276)

食後談話少時、此日此国の官報に日清戦争の報知を載せ、陸海共に『日本利あらず』との報ありしと聞く、一勝一敗、一喜一憂。(池辺 278)

[8月26日] 雨降ル 此日ハ日曜ナレバセントペートルスホッフノ公苑及ビ離宮ヲ観ント思シモ雨ニ妨ゲラル依リテ終日寓館ニ在リ 郵着ノ東京諸新聞ヲ読ム 日清ノ宣戦前論鋒甚ダ鋭尖ナルヲ見ル (池辺 283)

第2節 明治天皇発輦

既に(8月5日)参謀本部内から宮中に移されていた大本営は、戦争指導のため9月13日に広島へ移転し、15日に到着した(第5師団司令部庁舎に広島大本営開設)。その象徴である明治天皇(大元帥)の発輦は、諸日記に次のように記載されている。

[9月13日] 大元帥陛下御発輦大吉日。／〔中略〕大元帥陛下、御発車ヲ奉祈願ル御神前祭典ヲ行フ。此日ヲ以テ大本営ヲ広島ニ移さるゝに付、本日広島へ行幸あらせらる。此日、秋気新涼爽快、可人征清之將軍勇氣百倍、況や大轟之西進之盛事ニ於てをや。陛下万歳々々万々歳。(跡見 312-13)

[9月13日] 御発輦、広島へ迎えらる。(勝 499) ※海舟の記載が花溪などの記載とは対照的に異様に短いのは、漢詩「偶感 二十七年作」(勝 第14巻404)を見ても判る通り、そもそも海舟が日清戦争に批判的だったことも関係しているかもしれない。

[9月13日] 今朝 天皇を宮城の前面にて其の新征を送り奉りたり。帝者の壮! 吾ナポレオンを羨みたり。嗚呼帝王! 帝王! これを羨むの吾は亦山林の生活を羨む。吾は不思議の心を有す。(国木田 213) ※独歩の二重心理が良く窺える。

[9月13日] 天皇陛下廣島に行幸せらる、大本營を同地に進められたる為めなり、先是山縣有朋総指揮官として朝鮮に赴き、陛下には伊藤、西郷、大山其他の文官供奉せり。(原 220)

第3節 平壤の戦い(以後)

9月15日、第1軍は平壤総攻撃(曾て参謀本部顧問・陸軍大学校教官だったドイツ軍人メッケル直伝の包囲戦)を開始し、16日に占領した(平壤の戦い)。以後のことは、諸日記に次のように記載されている。

[9月15日] 本日我軍平壤を略取す(巖谷 228)

[9月22日] 明日ノ約アレバトテ午後侯爵ニ從ツテマホメツトパシヤヲ訪フ
[中略]

日清戦争ノ事ニ談偶々及ブ 両国ノ為メニ不幸ナコト抔茲ハ外交家的口吻アリ 面白ク聴カル、モ亦情アリ。(池辺 299)

[9月22日] 日本人の態度が、一般に予想していたよりも有頂天になっていないことは、認めねばなるまい。今や第二軍が編成中である。『時事新報』を先頭に全新聞紙は、敵を完全に粉碎するまでは、いかなる条件のもとでも講和しないことを要求している。(ベルツ 170)

[9月24日] 昨日は日曜日、午前九時二十分民友社を出で、一番町なる教会堂に出席して植村正久氏の演説をきく。今日の時勢の意味に就き説く処あり。日本をして再び精神的大潮にむちうたしむるは今日、支那との戦闘、我が国大勝利の時にあり。日本をして日本の伝道をなさしむるも今日なり云々。(国木田 221) ※独歩が植村の日曜説教を聴いていたことの確証。

[9月24日] 中井芳楠、横山安克氏より、二十六日午後七時、ホルランド・ロード林〔権助〕領事宅にて日本人会を開き、同日在英日本人の名義を以て、今回海陸戦戦捷を祝し、併て表誠醸金の儀相談するに付通知あり。予は出席せずと返事、但金一磅寄附す。(南方 351-52) ※在外日本人の行動の一例として注目される。なお、林は当時ロンドン総領事館一等領事だった。

[9月24日] 朝より靖国神社にゆきて、清国の分捕物を見る。社の拝殿の下の左右の屋中に陳列せり。左のかたは葉・聶の旗・帽子・孔雀翎等を列し、右のかたには兵卒の服と戎器を列す。提督軍門の標旗も左のうちに在りき。(頭欄)「官妓の服かと疑ふものあり。両袖ありて、丈ははつかに背と胸を掩ふのみ。黄色繩子に紫の縁あり」(依田 第9巻381) ※“官妓の服”については、『時事新報』9月1日第4面「雜報」欄にも記事——「○軍中に妓を携ふ」——がある。

[9月25日] 春木座にゆきて日本大勝利の劇をみる。安城の戦、松崎大尉戦死の場よし。八百蔵これに扮す。勘五郎山田少尉に扮して、砲戦よく實際をうつす。(依田 第9巻381) ※日清戦争期の演劇状況を物語る一例。安城渡(実際には佳龍里)の戦で松崎直臣歩兵大尉(歩兵第21連隊第12中隊長)が戦死したのは7月29日(成歎の戦の際)。補足すると、“歌舞伎の側でも今度の戦争をよそに眺めてゐるわけではなかつた。浅草座の川上一派に対抗して、先づ第一に開場したのは本郷の春木座であつた。春木座は後年の本郷座で、その当時の経営者は溝口権三郎である。狂言は『日本大勝利』で、初日は九月十一日、浅草座と十日間の差であるから、この当時としてはこれも早手廻しの部であつた。／ 筋立は新聞記事の継ぎ合せで、俳優は市川八百蔵(後の中車)[、] 岩井松之助、四代目中村芝翫、中村勘五郎、それに大阪俳優の中村雀右衛門、中村富十郎、市川駒之助等が加はつて、先づ相当の顔触れであつたが、脚本も大阪仕込みの勝何某の筆に成つたので、どこまでも在来の歌舞伎調を離れず、俳優もかういふ現代物には不馴れの連中のみであつたので、舞台の上の活気に乏しく、時節柄とて興行成績は左のみに悪くもなかつたが、その評判は甚だ悪く、八百蔵の李鴻章は高田實に遠く及ばずといふ不評であつた。殊にその眼目とする戦争の場が兎かくに舊式の立廻りに流れ、一向に實感を誘はないといふのが不評の大原因であつた”(岡本 42)。

[9月26日] 吾人神心を有するもの此の際に於て(日清開戦)高尚和平の思想を以て須らく大平和の秋を祈り又た平和を講ぜざる可らず況んや万国平和会員たるものをや(石井 明治27年260)

[9月26日] 夜林領事宅にて日本人会勝軍を祝す。七時開会、四十人斗りありし。会頭中井芳楠君を始めそれ〴〵祝辞あり、盃を挙ぐ。望月小太郎氏詩、次に予ど〴〵(命やる迄沈めた船に苔のむす迄君が代は。今一つ)。(後略)(南方 352) ※熊楠が祝勝会で都々逸(しかも国歌にまつわる)を詠んでいたとは面白い。

[9月26日] 美狭古と、もに川上音次郎の日清戦争の劇をみる。満場殆ど立錐の地なし。音次・浅次の兩人、新聞記者に扮す。高田実、李鴻章に扮す。(依田 第9巻381-82) ※川上の『日清戦争』7幕劇は、明治27年8月31日から浅草座で開演した。“この劇場は明治二十五年四月から浅草区新狼屋町、俗称どぜう屋横町に新築開場したもので、浅草公園の吾妻座に対抗し、小劇中では先づ高等の地位を占めてゐたが、興行成績はあまり思はしくなかつたらしく、最初は澤村座といひ、更に浅草座と改称し、今年も三月以来殆ど興行を休んでゐる有様であつたが、この興行は近来無比の大當りで、連日満員の好成績を挙げた。／ [中略] 勿論一種の際物であるから、むづかしく論評すべきではないが、短時日のあひだに纏めた急仕事としては、人物の配合や場面の變化にも相当の注意を拂つた跡があり、その後に出続した各種の日清戦争劇の

なかでは、やはり此の『日清戦争』などが優等の地位を占めるもの”(岡本 38)という。高田は李鴻章役が好評で、“これから俄に売出した”(岡本 39)。なお、迫真性追求の結果、座員の間で負傷者が続出し、“二名の医師”が“舞台の後ろに附添ひ治療を為す程”だったというが、可笑しいことに負傷者は支那兵の方が多く日本兵の方は少なかった。因みに当時は“陸海軍将校の家族”が“東西の棧敷を充たす有様”だったという(『〇川上芝居の支那兵卒に負傷多し』『時事新報』9月16日第1面「雑報」欄)。

[9月30日] 東京府民勝軍之大祝日也。／〔中略〕毎戸^(四)国旗ヲ掲^(五)テ、勝軍可祝達し有之。晩ニ祝宴ヲ開キ、我帝国万歳ヲ唱ふ。(跡見 317)

[9月30日] 山縣有朋第一軍を率て先発し、大山巖第二軍を率て出発すと云ふ。(原 220)

[10月1日] 〔頭欄〕出軍者を見て涙を流せり／かれらの家族を憶ふてなり(石井 明治27年266) ※素直な感情の顯れと言えよう。堺利彦も“或日、私は梅田停車場のそばで、第四師団の兵が出征するのを見送つた。道の両側の群衆が歡呼すると、軍隊中の騎馬の将校が挙手の礼をする。私はその光景に痛く胸を打たれて、頻りに涙を垂らしてゐた。それほど私は愛国者であつた。”(『堺利彦傳』[改造社、大正15年] 167)と回想している。

[10月2日] コラ〔ン〕ツ駅ニテ葡萄ヲ買フ ビツフエノ主人迄モ日清戦争ノ事ヲ問ヒシハ可笑シ(池辺 307)

[10月6日] 公使館ヲ訪ヒ公使高平小五郎君ト云フニ面ス 余曾テ一度ハ会ヒタリシ人ナリ

日清ノ戦争ノ話ナド承ル 朝鮮及天津当リニ領事館ノ履歴アル人故其話モ委敷様ニ思ハシメヌ(池辺 310-11)

公使館を訪ひて公使高平小五郎といふ人に面す。一二度は逢ひたる事ありし人なり、日清の戦争の話など承る。(池辺 311)

[10月8日] 午前十一時出社 四時帰 〔中略〕帰途坂井座〔京都〕見物 日清戦争、中山安兵衛 市川重五郎一座十一時後帰(巖谷 230)

[10月12日] 軍艦に乗り込むことに付き国元より不安の由申し来り辞退をすゝめらる。今朝只今、一書を裁して決心を申しやる。／昨夜は舊暦の九月十三夜と今井氏云ふ。共に散歩して九段に至り義太夫を聞きぬ。人生の事、生死の事、古今英雄の事蹟、ローマ、ギリシヤの古英雄、昔時の文明、千古の人情など思ひつゝけて義太夫をきゝぬ。／〔中略〕／吾何故に好みて軍艦に乗り込みて生死の間に突入するか。曰く吾を自然のうちに更生せしめんがためなり。更に言ひ換ゆれば愈々シンセリテイなる自然の兒とならんことのため也。

また他の言を以てすれば、吾が靈性をして一段の進歩あらしめんためなり。(国木田 236-37) ※独歩における義太夫の意味、(ワーズワース流の自然観を髣髴させる) “自然の兒” への拘りが注目される。

[10月22日] 今朝上陸したり。[中略] /朝鮮人の住宅を見たるは是がはじめてなり。/朝鮮人の生活を実見したるも始めてなり。/小丘と疎林と、畦道と、海澤と、岩礁と退潮、満潮と夕陽と、白衣と、野牛とは更らに一段の光景を加ふに似たれども、寧ろ吾をして此の民の生活其のものを憐ましめたり。/彼等は現今己れの国の如何になりつゝあるかを知らざるが如し。人民、政事、戦争、相関する幾何ぞ。大同江畔の此の光景は吾をして後年決して忘るゝ能はざる印象を与へたり。/昨夜士官室に於て艦長をはじめとして互に集会雑談し政事談尤も盛んなりき。何故に軍艦製造費をこばみたるかてふ問は切々吾に向つて発せられたり。/ [中略] /戦争。流血。軍艦。人生の事實なり。されど宇宙これ爾を包む大事實なるに非ずや。(国木田 240-41) ※(亡国の民である) “朝鮮人の生活を実見した” ことによる憐憫、また現実よりも宇宙——“大事實”——を優先する認識が注目される。

[12月19日] 井上公使の厳酷なる談判により、朝鮮政府に大改革を行ふ事となり去る十七日開化党諸氏のみを以て、新内閣を組織したり。[中略]而して、^(A)太院君は、退く事となりたるなり。東学党は尚ほ諸方に蜂起して止まず。王妃は、相不変陰謀百出す。/ 此頃、閔后井上公使の厳談が一時の驚喝なるや、又何れの程度に伯の心があるやを知らんと欲し、日々公使館に出入する某氏に托して、窃かに探らしむ。公使惘然之を看破す。曰く、今日の事二途あるのみ、其一策は、李鴻章を聘して顧問とするなり。二策は東学党を煽動して京城に入らしむるなりと、某苦笑して去る。(時事新報) 好逸話といふ可し。(上田

33) ※問題の“逸話”の出典は、高見亀(朝鮮京城特派員)「○京城特報」(『時事新報』明治27年12月18日第3面「雑報」欄)中の「王妃我公使の内意を探る」。

第2章 清国関連

戦闘の経緯を前もって略記する。

明治27年8月10日、日本艦隊が威海衛を攻撃。

9月17日、黄海海戦で日本艦隊が勝利(その結果、制海権をほぼ掌握)。

10月24日、日本の第1軍が鴨緑江渡河を開始し、第2軍が遼東半島上陸を開始。

10月26日、第1軍が九連城を無血占領。

10月29日、第1軍が鳳凰城を攻撃し、31日に占領。

11月6日、第2軍が遼東半島の花園口に上陸し、金州城を占領。また7日、大連湾も占領。

12月13日、第1軍が海城を占領（以後、逆襲が4回繰り返され、「海城の難戦」と呼ばれる）。

12月19日、第1軍が缸瓦寨を占領。

明治28年1月10日、第2軍（の乃木希典少将率いる歩兵第一旅団を主体とする混成旅団）が蓋平を占領。

1月20日、第2軍が威海衛の北洋艦隊攻撃を目的として山東半島榮城湾に上陸し、作戦を開始。

1月30日、第2軍が威海衛攻撃を開始し、2月2日に占領。

2月5日、水雷艇隊作戦が開始し、北洋艦隊の主力である定遠を夜襲。以後の攻撃で、7日には北洋艦隊を撃滅。

2月上-中旬、劉公島攻撃・陥落。

3月上旬、第1軍が遼河平原作戦を完了し、遼東半島全域を占領。

3月4日、第1軍が牛莊攻略戦（初めての市街戦）に勝利。

3月7日、第2軍が營口を占領。

3月9日、第1軍が田庄台を占領し、市街を焼き払って撤退。

第1節 内外片々

[10月31日] 夜第二軍司令官の許にて談話会あり山本芳翠謹話す詩あり贈を為す

贈芳翠画伯

踏破韓山戦血腥 刀光幟影入丹青 軍営一夜無聊甚 餘事還為柳敬亭（森240） ※従軍画家としての芳翠は、「朝鮮豊島沖海戦之図」（『東京朝日新聞』明治27年8月10日附録）などを発表していた。

[11月1日] 帰途靖国社にて 分捕品を見遊就館見物（巖谷 231）

[11月11日] ○錦町壺丁目のシヲラマをみる。豊島の海戦より始り黄海の戦まであり。中につきて平壤立見隊の牡丹台下の戦、松林中の接戦をよくうつせり。（依田 第10巻11） ※ジオラマ館は、神田錦町1丁目に前日（10日）新築開業していた。安藤伸太郎（有名な油絵師）の筆になる牙山・豊島・平壤・海洋島における日本軍大勝の“實況十餘図を掲げ”ていた（『○日清戦争シヲラマ館』『時事新報』11月11日第6面）。

[11月18日] けふは精覧会日なれば、荊婦と、もに歌舞^{〔舞〕}妓座にて劇をみる。此日の名題は海陸連勝朝日の御旗にて、この頃の戦の初めを作れり。朝鮮国王宮の場にて大鳥公使圭介を団十郎扮して議論よし。振威露宮、成欽大勝とつゞき、次に金助町裏借屋にて、団十郎の浪士進藤新九郎よし。この子新五郎を菊五郎扮す。次に平壤玄武門、菊五郎、原田重吉に扮す。次に大同江船頭かち蔵、団十郎扮して海戦のものがたりおもしろし。〔中略〕この日大鳥氏みづから西棧敷にて見物す。(依田 第10巻13-14) ※大鳥圭介が団十郎扮する自分自身をどのように見物していたのか、極めて興味深い。

[11月19日] 十五日の薄暮、大連湾を抜錨して威海衛に進発したり。／〔中略〕／十七日の薄暮、威海衛の前面に観兵式を行ひて帰る／観兵式とは冷評なり。／十八日の朝、大連湾に帰れば千代丸佐世保より来る。もたらす処何ぞ、曰く敵艦タークーに在るの電報大本営より達したるか故に石炭をも積まずして急航し来ると。／馬鹿な！ 敵艦の太沽に在ることは旗艦已に数日前之れを知り居りたるなり、而して空しく敵の威海衛に逃げ込みたるに及び観兵式を行ふ／馬鹿な！ 此の如き冷評は士官室に於て発せられたり。／伊東司令長官と参謀長とは士官の仲間に不信用を極め居るなり／昨日朝十一時頃より午後一時頃まで旅順の方に砲声をき、ぬ／〔中略〕／昨日聞く。英艦陸兵六千を舟山^{マツ}郡嶋に揚げたりと。之れ舟山列嶋を占領したる者に非ずや。衆評英の下心を悪む。英は機敏なり。／舟山列嶋は上海の沖に在り。／〔中略〕／新朝野新聞にて松蔭の七生説を読みぬ／哲人美士は必ず其の信仰を有す〔中略〕／凡そ宇宙観と人生観を有たぬ者程其の見識の卑しきは非ずとは軍人と交はりて感ずる処なり。(国木田 249-51) ※“伊東司令長官と参謀長”が“士官の仲間”に“不信用を極め”ていたこと、“機敏”な英国の“下心”への警戒、“宇宙観と人生観を有たぬ”“軍人”に対する独歩自身の侮蔑など、興味深い記載。

[11月20日] 騎りて出づ天后宮を觀る鐘樓鼓楼より大香炉に至るまで皆瑰麗僻邑の物に似ず所謂天后聖母の像は南欧諸国祠る所の処女マリヤに髣髴たり今工兵廠之に居る処々封印を貼付し間雑人をして近かしめず(森 241-42)

※鷗外の比較文化論的視点が冴えている。後に亀井も天后宮に注目し、明治28年5月17日に“支那地方港湾ノ在所必天后宮ノ在ラサルハ靡シ余カ経歴スル所ニ於テモ饒子窩旅順口皆之レアリ此ノ地亦其宮殿アリ今者我大連湾要港部大連湾知港事廳ト為シ海軍々人入テ此ノ社殿ニ營ス是ヲ以テ殿内安置スル所ノ偶像ハ之ヲ庭前ニ出シテ雨露ノ侵ス所ト為リ剥落原トノ形軀ヲ存セズ然レトモ本殿ハ光緒十八年秋ノ経営ニシテ今ヲ距ル僅ニ四年以前ノ築造ニ係ルヲ以テ粧飾華美ニシテ金壁燦然目ヲ奪フ其門頭天后宮ノ三

字ヲ顔シ海不揚波ノ四字ヲ大書ス清人ノ之ヲ信奉スルハ猶ホ我舟師ノ金刀比羅宮ニ於ルカ如シ”(652-53)と記している。奇しくも津和野(亀井藩)関係者が共に天后像に関心を示したことは興味深い。

第2節 旅順口占領(以後)

11月21日、第2軍が旅順口を占領した(が、その後の旅順市街における残敵掃討作戦が、「旅順虐殺事件」としてアメリカの *New York World* やイギリスの *Times* 等の外国紙を通して世界に報道されることになる)。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[11月21日] 此日は第二軍旅順に逼るの時なり予等心窃に衛生材料の給せざらむことを恐れたりき是に至りて人と物と皆備り部署全く定まる同僚皆快と呼ぶ夜半報あり云く旅順我有となると(森 242)

[11月24日] 放順口占領の報始めて到る 此の報知ニ依而オレの進退がいよ〜定まると云のだから愉快一層也(黒田 351)

[11月24日] 号外、／ 旅順口占領／ 右攻撃ハ十九日より始まり、激しき戦争が引続きたる後、廿一日に全く略取せられたり。(跡見 330)

[11月24日] 夜旅順口陷落の報あり(巖谷 233)

[11月24日] 今宵旅順口占領の報を得たり。此攻撃は十九日以来劇烈なる戦闘の末二十二日に終りを告げ、首尾よく我全勝に帰したるものなり。(上田 24)

[11月24日] 梅潭いふ、旅順の攻撃の日延期せられしは、長州の兵隊の来着をまつがゆへなり。薩人のみ功あらせては、両国人矛楯を来さん事をおそるゝがゆへなり。〔中略〕げにさる事もありけんかし。(頭欄)「長入佐久間に命じて、のち山東に向はしめたるも、さる心ありてにや」むかし京都を攻めし足利、鎌倉をうちし新田等、おのゝその功にはこりて、終に両家の確執となりし事あり。鑑みずばあるべからざるか。午後号外ありていふ、我軍は去る十九日より烈しき砲撃のうへ、廿一日全旅順を略取す。(依田 第10巻15) ※史家としての学海の眼光が光っている。対外路線を巡る薩長対立は、庚申事変(1884年12月)の事後処理の際にも見られたことである。

[11月25日] 旅順口占領ハ全く廿一日払暁より始り、一日にして略取せり。帝国万歳、市中万歳之声天々響き、勝利之祝にて賑々敷事也。(跡見 330)

[11月25日] (頭欄)「旅順城を抜きし公報」今朝の新報に、大山大将巖の公報をのす。〔中略〕又国民新聞の社員小林萬吉が広島よりの報に、敵の定遠・鎮遠

の二艦は、ともに我艦隊の猛烈なる砲撃に遭ふて撃沈せられたり。(頭欄)「敵の鎮遠・定遠の事は訛伝なり。たゞ鎮遠坐礁の事はまことなりといふ」[中略]夜に入りて又号外の配達あり。(頭欄)「この号外は頗る誤多し。[後略](依田 第10巻15-16) ※“今朝の新報”とは『国民新聞』のことで、具体的には『国民新聞附録』に関係している。それには、小林萬吉(在広島国民新聞社特派員)が至急報として紹介した大山の公報「旅順口占領の詳報」(24日午後6時10分広島発、同日午後6時57分国民新聞社着)が掲載され、また小林自身の至急報「我艦隊敵の二大艦を撃沈す」(24日午後5時17分広島発、同日午後6時27分国民新聞社着)も掲載されている。

[11月26日] 今朝、旅順ノ占領ヲ聞ク。[中略] 今夕新聞[具体的には『日本』明治27年11月25日第2面「雑報」欄「●旅順占領の快報」]ヲ見、狂喜ス。実二日出度シ。此ノ夜、齒抜ケタルヲ夢ミ、亦鷹ヲ夢ム。吉カ凶カ。(山本183)

[11月27日] 去る二十五日の時事新報[第4面]に、旅順占領の公報[正確には「旅順口占領の公報」]をのせたり。其要[「占領公報の要報」]に曰く、二十一日の払暁より全軍三道より進みて、同日午後四時頃までに陸上諸砲台を、二十二日午前中に海岸諸砲台を占領し終り、茲に我全勝に帰し、戦利品甚だ多く、特に大口徑の大砲弾薬等あり。此役我死傷二百余名あり。又海軍公報は、今日達せり。(上田 25)

[12月1日] 旅順口は二十一日に陥りたり。二十四日か五日に一寸と上陸して饅頭山砲台附近を見物したり。／始めて支那人の死體を見たり。今ま尚ほあり〜と眼底に印象せられ居るなり。／『戦死者』の實見は、吾をして『戦』なる文字の眞面目なる消息を直感せしめたり。(国木田 255) ※“『戦死者』の實見”の衝撃が、ありありと伝わってくる。

[12月11日] 米国ニウヨークウオールト [New York World] 特派員クリールマン [James Creelman] 氏ハ夙ニ朝鮮ニ入り戦地ニ従行シ今亦旅順口ノ陥落ヲ實見シ歸テ其ジヤパンガセット記者ニ語ル所ヲ東京日々新聞ニ抄出記載セル二三ノ評語アリ其所論亦大ニ見ルベキモノアリ因テ左ニ転載ス

沈黙ノ兵 彼レ曰ク 日本軍ハ或点ヨリ見ルトキハ頗ル奇異ナリ其進行スルニハ音楽ナク旗幟ナシ沈黙ニシテ實用一方ニ働キ其組織堅固ニシテ而モ極メテ精練ナリ最高將官ヨリ最下士卒ニ至ルマテ愛國心ヲ以テ陶冶セラレ將士悉ク具ハレリ

衛生ノ完全 衛生及び輜重ノ整頓セルハ世界ニ比類ナキ所ナリ但シ日本ノ輜重部ハ馬ノ缺欠セルカガメニ困難シ多クハ人ヲ以テ勞作ニ服セシメタリ

シコト〔ヲ〕^{〔原文集〕}記憶セサルベカラズ其野戦病院ハ歎称ノ外ナシ第一第二戦ニ於テ兵士皆亜麻布ニ包ミタル堅固ノ安全針ニテ絨ツヘキ防腐繃帶ヲ携ヘ負傷スルアラバ自ラ之ヲ裹ムヲ得セシメ傷者ニシテ能フナラバ本営ノ野戦病院ニ歩行セシメ若シ能ハズンバ衛生隊来リテ之ヲ扶致ス

人夫マテ勇ナリ 日本人ノ勇壮ナルコトハ問フヲ要セス余ハ武装セサル人夫カ余ノ馬ニ傍フテ彈丸雨注ノ間ヲ行キ意氣昂壮常ニ笑声ヲ発シツ、走ルニ驚ナリ余ハ敵若シ彼ニ迫リ来ラハ彼ハ遁逃セスシテ却テ彼等ニ石ヲ投スヘキコトヲ信ス

慘トシテ驕ラス 日本軍ハ敵ニ向テ進ムニ當リ最大ナル注意ヲ為シ其清兵ニ向フヤ李國ノ近衛兵ニ向フト同一ノ用慎ヲ以テス故ニ戦テ勝タルナク勝テ驕ルコトナシ夜間運送船ノ俘子窩ニ在ルヤ極メテ暗黒ナリシニモ拘^{〔原文ナシ〕}〔ハ〕ラスーノ燈火ダモ点セスシテ偵知ヲ避ケタリ以テ其用意ノ周到ナルヲ推スヘシ（亀井 359-60）

※問題の記事は、「○従軍外人日本軍を評す」（『東京日日新聞』明治27年12月7日第2面）。原文は漢字・平仮名書き。転載文は見出しの傍点を省き、濁点を一部残している。「旅順虐殺事件」報道で有名なクリールマンの記事も、政府系の『東京日日新聞』が媒体になると、日本に好意的な論調に改竄されたことの証拠。ただしクリールマンに言及・引用していること自体が、当時の日記としては珍しい。

第3節 内外片々

11月27日、李鴻章の懷刀であるデトリング（元ドイツ人、天津税務司）が国書を携帯しないままで来日。

〔12月1日〕 大鳥前駐清公使の歓迎会を帝国ホテルに開き余も出席せしが、諸学会にて発起したる者にて来会者二百名斗りあり、後世歴史には如何に記するや知るべからざれども、此回の行為は上出来にはあらず、全く陸奥外相の庇護によりて其職を全ふせしのみなり。（原 221）※大鳥圭介の帰朝歓迎会は既に11月24日に芝公園の紅葉館で盛大に開かれていたが、原の大鳥評価が辛辣な点は興味深い。

〔12月2日〕 近事片々 此頃の新開紙より拔萃して一文を草す名けて近事片々といふ。／ 一、軍事手形は我清國に於ける新領地に流通せしむる為めに発行するものにて、日本銀行の建議に係り内閣にて、既に會議により可決せらる。其仕方は、占領地に於ける通貨として我銀貨を用ゆる時は、不便少なからざるのみならず、硬貨の流出する事夥だしく斯くては我經濟に損害を

及ぼすの掛念なきにあらず。故に此を發行すとなり。／ 二、日米条約改正〔中略〕／ 三、都新聞 先月三十日の紙上に社説として論ずらく。我国が、支那の要地占領せんと求るは、東洋の覇権を握らんとするなり。即ち支那を始め他の諸東洋国を興して、將に此を蹂躪せんとする欧州諸国に抵抗せんとするなり。日本人士の責任大なるかなと、真に余が論と符合せるものといふ可し。／ 四、ジャパン・ガゼット 同日の紙上に曰く、日本は諸欧州国が、未だ看破する事能はざりし所の支那政府の腐敗を看破したり。〔中略〕暗に早く勢力の膨張せざる中、日本に干渉せよといふものの如く論じたり。興亜策に抵抗する論者は思ふに之か。(上田 27-28) ※“軍事手形”への注目は、さすがに将来の経営経済学者の片鱗を窺わせる。また、西洋列強の東洋“蹂躪”——帝国主義的侵略——に対抗する“興亜策”(後の「大東亜共栄圏」思想のルーツ)を當時の上田が抱いていたことの重要な証拠。

〔12月2日〕日本人の態度は、その大戦果からみて、模範的に冷静である。／かれらは、事を運ぶに先だち、あらかじめ結果をすべて決めてかかるほど、確かに自信満々たるものがある。こんな有様だから、〔中略〕旅順占領の絵も、ずっと以前から売出されていた。『グラフィック』誌は、日本従軍画家の信じられないほどの多作振りに驚嘆しているが、十枚の絵のうち九枚は東京で作られたに過ぎないことをご存じないのだ。(ペルツ 171) ※在日外国人の冷徹で皮肉な観察と言えよう。

〔12月4日〕清国漢字新報に、皇上特に恭親王・李鴻章・李鴻藻・翁同龢・剛毅等及び独人漢納根に尚方の劔を給ひ論らく、所有二品以下各官、もし敢て倭と和を講ぜんことを請ふものは、其軍法をもつて便宜事に従ふを准るす。外国諸新聞をみるに、清国は欧州諸国に向ひ我日本と和睦の仲裁をのぞむこと、凡そ兩度に及べりといふ。しかるにそのいふ所かくの如し。所謂掩耳偷鈴の類なるか。凡かくの如きの文字、かの土の新報に見ゆること勝てかぞふ可らず。こゝをもて、近來支那の昔より伝ふる史籍ののする所は十の八、九は皆偽なりといふに至るも、またその理なきにはあらじ。支那人の腐敗もまたきはまれりといふべし。信を今人に失ふは猶可なり。古人をして信を後世に失はしむるはまた甚しからずや。(頭欄)「清国の言行矛盾」(依田 第10巻19-20) ※学海の中国通ぶりが良く窺える。

〔12月6日〕今朝支那兵ノ死體埋ヲ見ニ行ク(黒田 354)

〔12月6日〕(頭欄)「川上の戯」市邨座、川上音次郎戦地見聞記の戯をみる。音次郎が朝鮮よりつれ来りし鄭以文といふ男子をみる。第四幕に、この男、

音次郎に従ひて九連城の兵站部に至り、この営のかたはらにて、満洲の騎兵のたふれたる側にて、その旗・衣服・剣など拾ひとる所を演ず。実にその地をみるが如し。又、小島大尉といふ人に故郷の書の伝達をたのまれてかへらんとせしに、大尉俄に創によりて死し、音次郎その書を携て、尾張名古屋の小島の妻子に対面する所あり。此場、本日第一等の妙処なりき。余、音次郎、真氣活現の四字を書してあたへき。(依田 第10巻20) ※川上は“演劇材料蒐集の爲め”10月22日に渡韓の途に上っていた(「〇川上渡韓の途に上る」『時事新報』10月23日第8面「雑報」欄)。“十一月下旬に帰京すると、十二月三日には直ぐに市村座の初日を明けた。元来がセカ／＼してゐるやうな男であつたが、萬事が實に機敏であつた。その狂言は『川上音二郎戦地見聞日記』七幕、これまた人気に投じて、小屋も割れるばかりの大入りを取つた”(岡本 41)。学海は開演早々の3日目に見物していたことになる。

第4節 東京市第一回戦捷祝賀大会

12月9日、東京市第一回戦捷祝賀大会が上野公園で開催された。“戦争の最中だが、もう勝つたことに決めてしまつて、馬鹿に景気の好いお祭り騒ぎだ。その日は薄曇りの寒い日だったが、種々の餘興などあつて大そうな賑ひ、各新聞でも前々から盛んに書き立てたので、地方からわざわざ出て来る人達もあつて、その當分は東京市中も繁昌した”(岡本 21)という。この日のことは、諸日記に次のように記載されている。

[12月8日] 夕景、乗月、上野公園に散歩ス。明九日東京市民祝捷会に付、公園馬見場より馬場不残、竹柵に結_ヒ、紅白之幕張詰_ル。不忍池中、清艦定遠、致遠^(マ)泛^(マ)ヘリ。黒門跡に玄武門_ヲ建_テ、所々_ニ緑門アリ。明日之光景可思。(跡見 333)

[12月8日] 上野の史談会におもむく。あすは祝勝会とて都下の富人発起にて、多くの人を集めて宴をこゝに開くよしにて、公園の入口、むかしくゞり門とてありし処、大なる紙糊の門を立たり。これ朝鮮平壤なる玄武門に擬するよしにて、しか／＼しるしたり。三はしの処には大きな緑門を立たり。これには帝国萬歳の字を大きくしるす。[中略] ○征清役はいまだその半に至らざるに、はやくも祝勝会を開くはいかにぞや。ましてや従軍の將士寒地にありて、風霜^(マ)を苦を嘗む、都人何の心ありて快を賞すべきや。大勝を得てかへりてのち、將士と同じく会を開くとも、何ぞおそしとすべき。(依田 第10巻20-21)

※このような祝勝会時期尚早論は珍しい。

[12月9日] 愛治郎始、表、人々、皆祝捷会會員_ニ付、七時半出門ス。余、千久、桃子、栄子_ト同しく、佐藤芳三郎氏宅_ニ行。會員一同、宮城前_ニ万歳_ヲ唱へ、夫より行列、皆佐藤氏門前_ヲ過、昼比迄見物ス。喫昼飯_ニ歸。実_ニ其人幾千万人なるや、不可計。四時頃より池之端中井氏_ニ行、楼上ヨリ、かの定遠、致遠_ニ水雷艇_ニテ焼打之處、実_ニ壮快、未曾有之盛會也。筆紙不尽。(跡見 333)

[12月9日] 本日上野公園第一回祝捷大會あり但し微少不快ニテ不行(巖谷 234)

[12月9日] 本日はこれいかなる日ぞや、苟も我大日本帝国の首府東京市民が、今日をはれとの日清戦争祝捷大会の開日なり。即ち同会は、我大東京市の有力者が企てたるいとも尊とき大会にして、開場は上野に於てし、同所にては前日来より玄武門、軍艦等をしつらへて此大会を、盛にするの準備をなせりといへり。余は例の件[病床]あれば親しく会場に列する能はざれども、唯々一片愛国の赤心は、勃々禁ずる能はず。打ち揚げられし花火の音はいとも愉快にきこえし。／ 我征清の皇軍向ふ所敵なく、今や奉天、天津の占領も近きにあらんとす。而して、此戦のをこりし本は、一には朝鮮国独立のためにあり。然るに、其朝鮮国を見れば、毫も進歩の有様なきのみか、却て退歩の徴あり。是れ最も怪むべきの咄々怪事^(キ)に非ずや。されども尚ほ深く考ふれば、甚だ解し易すきの事たり。即ち太院君は先きに朝に立ちて新政を布き、王妃は權力を失ひしと雖ども、同君もまた守旧の一老翁にして、専恣妃に譲らず陽はに我勸告を入るゝと称すと雖ども、密々事大の精神を脱せず、又陰かに東学党を煽動して我進軍を妨げ且つ、少しも我心を体せず即ち暴を以て暴に易えたるものにして、流石に井上公使も、其処置に苦しみたる可し。頃々「公使朝鮮政府の我勸告を実にせざるを憤りて軍隊を引上ぐるの旨を彼に通知したり」「彼政府の大臣は之を恐れ、数ヶ条の規約を謝罪書として公使に草し出したり」「王は之を裁可し結果公使に謁見仰付けられたり」杯の電報文が新紙上に初号活字を以て顕はる。(上田 30) ※上田の朝鮮政情への関心と“愛国の赤心”の言明が注目される。

[12月9日] 祝捷会として全都狂するが如き祝祭をなせり。(原 221)

[12月12日] きのふの祝捷会は、殊不体裁をきはめたりといへり。五円の集資の人も、五十銭の人も待遇いづれも同じく、十銭の人に至りては、無銭の人と異なる事なく、多人数あつまりしかば、雑沓にして多少の傷負ふものありしといふ。笑ふべし。(依田 第10巻21) ※学海の祝勝会嘲笑は手厳しい。

第5節 内外片々

〔12月10日〕 井原直澄氏の招ニテ芝居ヲ見物す（黒田 355）

〔12月12日〕 吾が目下の戦は、吾を誘ふて止まざる周囲のアイドルなり、カライル曰く此の世界に於てアイドルこそ最大の怪物なれと、吾は此の怪物の怪力に破られつゝあるなり。苦戦しつゝあるなり。／日々夜々、空々然として逝くなり。／朝起くる時八時、夜眠る時十二時或は十時、若しくは一時。昏々として只だアイドルの支配の下に在り。観察する処何物ぞ曰くなし。／大連湾！

吾には見慣れたり。（国木田 259）※戦中、独歩が“アイドル”（idle、無聊）に苛まれていたとは意外。カーライルについての出典は、“Occasional Discourse on the Negro Question”（*Fraser's Magazine* 1849年12月号）——後に表題を一部改変し幾つかの増補も行なつて（*Latter-Day Pamphlets* の先駆として）*Occasional Discourse on the Nigger Question*（London: Bosworth, 1853）として単行——かもしれない。“No work no recompense”（働きなければ見返りなし）を自然法とするのがカーライルの持論であつた（*Chartism* [London: Fraser, 1840]）が、特に *The Nigger Question* には “Whatsoever prohibits or prevents a man from this his sacred appointment to labour while he lives on earth,—that, I say, is the man's deadliest enemy;” とか “idleness . . . and I say deliberately, the very Devil is in it.” といった箇所がある（引用は Centenary 版 *The Works of Thomas Carlyle* 第29巻即ち *Critical and Miscellaneous Essays* 第4巻 [London: Chapman, n.d.] に拠る）。

〔12月12日〕 今日の時事新報は「眼中清国なし」と題して戦勝後我が割領す可き土地は清国の後酬に備ふべき限りにあらず。何となれば、彼国は已でに滅亡の運命にあればなり。宜しく向後大清帝国を各国が割分するに際して彼の中原に腕を振ふに便なるを、撰む可しと論ぜり。（上田 31）※「眼中清国なし」は、13日の社説（第1面「時事新報」欄）であり、12日の社説——「朝鮮人の教育」（第1面「時事新報」欄）——ではない。12日前後の記載は断続的であり、13日の記載はなく、15日に跳んでいるので、これは12日ではなく13日の記載と見るべきである。

第6節 第一次講和会議

清国講和使の張蔭桓（総理衙門大臣）のことは、事前に次のように伝わっていた。

〔1月18日〕 講和使張蔭桓^{〔註〕}の事、新報にみゆる所一ならず。されども近藤柳塘のいふ所をきけば、警視庁にて諸新聞社をば召び出して、講和使の事につきて利害等はいふこと勿れといましめしよしなれば、その来る事は治定せりとしらる。張は戸部侍郎なりといへば、さして全権など委ねられたる貴人と

も覚えず。(頭欄)「新報に戸部侍郎にて少司農をかねたるよしをのせたれども、戸部は即司農なり。少司農即侍郎なり。別に官あるに非ず。新報の執筆者かの地の制度にくわしからぬにこそ」(依田 第10巻37) ※学海の漢学者としての学識が光る。

実際に広島県庁で第一次講和会議が開かれたのは2月1日のことだが、翌日、清国の全権委任状不備を理由に日本は交渉を拒絶した。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[2月1日] ○清国媾和使張蔭桓^[hi]はすでに広島に着し、本日国書を捧げしといふ。(依田 第10巻49)

[2月3日] 今朝時事新報を読みしに昨二日我伊藤、陸奥の両全権委員は清国講和使張邵二氏に会見し、其全権より清国皇帝より委任せられし資格に於て見えるところあるを以て、談判に應ぜざる旨をいひ放ちたりといふ由を二重丸うつて、見受けられたり。(上田 46) ※問題の記事は、「○清使全権の資格なし／我全権談判に應ぜず」・「○談判拒絶の顛末」(『時事新報附録』)。

[2月3日] 清国媾和使張、邵の兩人米国郵船にて神戸に來り、夫より御用船にて広島に赴きたりしが、二回我辨理大臣(伊藤、陸奥)と会見せしが、其全権委任状不十分なりとて之を開談する事を謝絶したれば、媾和使は已むを得ず帰国に決し、來四日長崎を経て帰国する事となれり。／一方に於ては国民戦勝の餘威其要求過大なり、而して衆議院は軍費幾多にても支出すべき旨決議し、又他の一方に於ては我北征軍僅々兩三日前に威海衛を攻落したる位にて其進軍遅々たるも国民未だ外征に倦まざる今日なれば、媾和の成らざりしは寧ろ得策なりしに因り其旨陸奥外相に内信にて申置きたり。(原 222) ※原は講和不成立を「寧ろ得策」と考えていたことが判る。

[2月4日] 媾和使の放逐をききて快然(石井 明治28年25) ※石井の愛国者としての横顔が看取できる。

[2月4日] 夕の号外に、清国の媾和使張蔭桓^[hi]は全権の委任状を持せざるが爲に、我邦はその談判を拒絶し、これを長崎におくりて本国にかへさしむるとなり。彼等は、なにゆへはかくは疎漏なる^(ママ)。又別にこれを持せざるはゆへある事にや。殊に怪むべきは、米国の前内務大臣とか聞へたるフ氏^{フオスター}(頭欄)「普斯達」なり。はるゝとこゝに來りしに、などてその使臣の権をよくしらで、うかゝと來りけん。疎漏千萬なる外人なるかな。顧問などいふはいつはりにて、かゝる次に他人の錢をもて日本遊覽にや來りにけん。さても興がる赤髭かな。(頭欄)「^{チフトリンク}涅徳倫」(依田 第10巻51)

[2月7日] 昨六日外務次官林[董]氏は衆議院に於て媾和使に対する談判頗

末の公報を報告せり、其中にて清使に対し伊藤全権が演説したる言の中に清国は殆んど列国と分離し、時に或は列国と共に得可き利益を享有する事あれども其交際上の責守に至ては淫に顧みざる事あり、「清国は孤立と猜疑とを以て其政策とす。故に善隣の道に必要とする所の公明と信実とを欠くや宜なり云々。清廷の欽若使臣が外交上の盟約に公然合意を表せし後却て翻然として之れに調印する事を拒み或は儼然已に締結せられたる条約に向て更に明白なる理由もなく之を拒否するの事跡一にして足らず云々。其より彼使が有する全権の不完全をのべて清廷の意は未だ和を求むるに切ならずと確信す」といひ、つまり左様の唯日本全権の陳述を自国政府に報ずるに止まる如き使臣に向つて談判を開く能はずと結論し、尚ほ相当の使臣を派し切実信誠に和を求めんには、更に其談判する事を拒まざるならむという。之れ其要領なるが其前述の如きは実に万丈の気焰を吐きたるものという可く国会にても大拍手を以て迎へたる由時事『時事新報』明治28年2月7日第3面「衆議院議事（六日）」・「衆院所見（六日）」欄は記しぬ。（上田 46-47）

〔2月25日〕 此日、媾和使談判前後の顛末に関する詳細の書類を得たり。（近衛 8）

第7節 内外片々

〔2月3日〕 市村座の戯をみる。荊婦・二女及び藤井氏の婦と五人なりき。戯は明治四十二年といふ題にて、川上音次郎、馬丁清蔵に扮し、藤沢浅次郎、藤村少尉に、守住月華（久米八）、その妻に、（加藤桂）かつら、その女はつ子に扮す。支那の戦地にて、少尉創を負ふて病院に死せしとき、己が財産の処分を馬丁に委ねしに、軍夫ありてひそかにこれをきき、これを奪はんとするを、馬丁、十五年後かへり来りて、その偽をみやぶるに終れり。月華の伎芸頗るよし。かつらも又あしからず。音次郎余にいふ、久米八は久しき俳優なれば、写実の伎はいかゞあらんと気づかひしに、その妙、実に人をして驚かしむと。げに、その言の如し。余もその妙に服す。此日、鈴木得知・条野伝平・関根呂好も見ゐたりき。（依田 第10巻50）※“二十八年二月に〔中略〕市村座で『戦争餘談明治四十二年』を上演すると、これも大當りであつた”（岡本 41）。

〔2月8日〕 ○戦後の善後策 豊公のなせしに倣つて国替の方策をとらざる可らず——然るときは一部の殖民長として実に有徳敏才の士を要す——吾国果して其の人ありや否—〔一〕若し天子に往けと命し玉はは予は予が海外移住隊をひきひて彼の地にゆき 第二の日本——地上の天国を彼の地に築くこと

易々なり 知らず当局の有司果して其の心算ありや否 皇天願くは蘇峯兄と共にあつて而して戦後の善後策を聖旨の如くならしめ玉へ（石井 明治28年28）※石井の“戦後の善後策”は、“豊公”（豊臣秀吉）の“国替の方策”（対外侵略・殖民）路線を模倣していたことが明瞭。また、石井は徳富蘇峰に兄事していた。

〔2月9日〕 戦後の善後策 ことに由らば吾党は大清に移住するの覚悟なかる可らず（石井 明治28年28）※前日の続きだが、今度は移住先が朝鮮を越えて清国になっている。

〔2月12日〕 わが軍隊が北京城を略取すると吾党が独立城に乗入るとは一層の名誉なりとす／之れ吾輩が人間として此天地に対し将さに尽さざる可らざるの義務責任なればなり（石井 明治28年30）※先日の続き。石井には（東洋）十字軍の構想があった。

〔3月17日〕 帰宅中、Third Ave. 二十五丁目ノ隅ニ巡查立番セリ。余慰懃ニ貴君ノ勤務時間ハ何時間ナリヤト問フニ、彼レ曰ク、平均六時間、或者ハ十時間勤ムルナリ、ト云フ。幾個警察分署アリヤト云フト、彼曰ク、I don't know, about thirty. ト頗フル曖昧ナリ。彼曰ク、君ハ支那人ナリヤ。答ヘテ曰ク。日本人ナリ。彼又問フテ曰ク、日本ハ米国ヨリ大ナリヤト。吾人ハ彼カ問ニ一驚ヲ喫シタリ。如何ントナレバ支那ト日本ノ戦争ハ隠レモナキコトニシテ、時節柄ハ、日本どの位ノ国位ハ知リソウノモノニ、彼ハ知ラザルモノ、如シ。余ハ曰ク、日本ハ人口四千万人アリテ、支那ハ三億余ナリ。支那国ノ大ナルコトハ日本国ノ三十倍以上ナリト云ヘリ。彼ハ始メテ知リシ如クナリキ。（留岡 459）

第8節 丁汝昌降伏・自殺

2月12日、北洋艦隊司令官の丁汝昌が（服毒）自殺した。このことは、諸日記に次のように記載されている。

〔2月12日〕 威海衛を占領し、丁汝昌降伏し、軍艦十隻兵器弾薬皆我有に帰す、丁汝昌、劉歩澹、張文宣自殺す、是れにて北洋艦隊全滅に帰したり。（原 222）

〔2月12日〕 ○清国の提督丁汝昌、劉公島より降る。軍艦・砲台も尽く献ぜりと。（頭欄）「威海平ぐ。丁汝昌降る」（依田 第10巻54）

〔2月14日〕 今朝の新聞〔『時事新報附録』〕によると／ 去る十二日北洋艦隊の一砲艦白旗を掲げて来り、我艦に向ひて提督より軍艦砲台及兵器等一切差出すにより陸海軍人、外国人、及平民の生命を助けられよと申越したりと

の報昨日大本営より陸軍省に達せしといへり。又右に付き我手に入る可き軍艦は、平遠、鎮遠、濟遠及広丙ほか砲艦十余隻にして丁汝昌は捕虜として日本へ護送せらる可しといふ。(上田 48)

[2月15日] 此朝、敵艦降伏ノ報ニ接ス。丁氏何ゾヤ。死スヘキ時ニ死セスシテ……。正午前ヨリ雨降ル。帰路濡レテ困ル。征清軍ヲ思ヘ。コレシキノコトガト、意気揚々タリ。夜青山来ル。威衛ヲ話ス。(山本 200) ※丁汝昌の自殺の頃合いについて、旧知の海舟は「我深感／君之心中果決無私亦嘉從容不誤其死期」[「我は深く君の心中 果決無私なるを感じ 亦從容として其の死期を誤らざるを嘉」](勝 第14巻406)していたのに対して、山本は寧ろ批判的だったことが判る。

[2月17日] ○号外来る。嗚呼丁汝昌、余は鐘崎三郎よりも大寺少将よりも君を哀悼す。君は實はオスマンパシヤ也。文天祥也。劍戟折れ彈藥尽きて君国に殉す。君が破れたるが為め、我が提督を以て君より偉なりとする能はざる也。哀哉、余は此号外に接して、熱淚淋漓。

二月十七日午前十一時二十五分發島大本營發伊
丁汝昌等の自殺
昨日司令長官は敵の軍使に向ひ、降服の事を申し、
依り軍艦を開放すべしと面して本日午前十時に再
び來り、命せしに今朝其割腹に來り報せて
曰く昨夜丁提督劉步蟾・張文宣は自殺したり
ウブ・センは自殺したり
跡の事は應て英人抹格兒阿に委任したりと云
ふ依て司令長官は右マツ
クルウアに今日の書翰を
發し掛合中なりと
十三日午後二時發陸軍 黒井海軍大尉

(内田 432)

※丁汝昌に対する同情の中でも、魯庵のものは特筆に値する。

[2月17日] 号外に、十三日午後一時発の電報に、昨日艦隊司令長官伊東祐亨は、敵將丁汝昌が使に向ひ、降服の事了承し畢ぬ。よりて軍港をあげ渡すべし。そのよし主將に告げて、本日午前十時までに來り報ぜよと答しに、今朝十時前に使來りて、昨夜丁提督・劉步蟾・張文宣は自殺せり。(頭欄)「丁汝昌・劉步蟾・張文宣自殺」後方は英人抹格兒阿に委任せりとありしかば、即ち書を英人に投じて降を促せりと。(頭欄)「英人に委嘱せんといひしかど、我將これをゆるさず。なほ清人を用ひしといへり。げにさもありぬ[べ]し」[第九号の水雷艇は定遠艦にうち砕きものなり。その長は吉野大尉といへり。帰途、かの艦の為にうたれて死せしものありしなり]又、十三日午

後六時の旅順よりの電報に、第二師団の独立騎兵、昨日午前九時寧海に入る。敵のこれに抗するものなし。昆家屯川東に敵一人をみず。きく所によれば、八、九両日昆家屯より二部に分れ、大部は福山県、小部は烟台に向ひて退けり。寧海の人民、我に対し不穩の状なく、却て我軍の来るを喜ぶの色ありと。又、威海衛にて去る五日戦死せし我第九号の水雷艇の機関手一名・火夫三名は、敵これを劉公島のうちに埋葬せりといふ。劉は定遠艦長、張は劉公島の長官なりと。〔中略〕○丁汝昌は今を距ること五年前、北洋艦隊を率ゐて本邦に來りしかば、時の外務大臣榎本武揚これを小石川の後樂園に宴す。余もまた招待にあづかり。その時五古一篇を賦してこれにおくりき。今その殉節をきゝて、これが為に惘然たり。丁は禹亭と号す。尚書の銜を帯べり。(頭欄)「丁汝昌に詩をおくりしことあり」○去る十二日午前八時三十分、敵、我旗艦松島に來り、彼れの戦艦・砲台及び軍用品を我にわたすべし。軍人及び外国人を放免し、且これが保証を英國水師提督に為さしめんと申込む。十三日午後五時三十分、英國水師提督保証の件をのぞくの外、これ承諾す。此夜、丁・劉・張の三将自殺して、依頼書を送れり。本日(十四日)、劉公島の守備兵を受けとり、明日これを我歩哨線外に護送解放する筈、但將校・外国人は未決なれば船舶にてこれを某地におくり解放すべしとあり。(頭欄)「前にいふ抹格兒阿とはこの水師提督の事にや。彼、局外の人なるべきに、この保証の任をなさんとす。豈非義にあらずや。のちにしろ、この英人は提督にはあらず、島中に雇使せらるゝ無頼漢にて、言ふに足るものにあらずと」(依田 第10巻 57-58) ※丁が北洋艦隊を率いて來日した時(明治24年7-8月)、時の外務大臣榎本武揚が小石川の後樂園で開いた歓迎会に学海も招待され、その際に丁に詩を贈っていたとは興味深い。実際、『学海日録』明治24年7月10日の項には、「此日詩一章をつゞりて、丁提督禹亭に贈る。禹亭名汝昌、清国北洋艦隊提督にして、先年曾國藩に従ひ長髮賊を平げ、又朝鮮に使してかの国の乱を平げし人といへり。よて余が詩中に、

嘗伝剪緑林 嘗て伝ふ緑林^{ほろぼ}を剪すと
更聞服麗朝 更に聞く麗朝を服するを

の句あるは、これが為なりき。”(依田 第8巻277)と記載されている。

〔2月18日〕 去る十二日の夜即ち降参使を送りたる当日北洋水師提督丁汝昌、定遠艦長劉步蟾、及劉公島守備統領紀文宣は自殺したり。／ 支那軍人中共に語るに足るものは丁氏を措て求めやすからずといふ。其戦ふの不利なるを知りて寧ろ生靈を救げんと決心して降服しこれを自ら生くるの恥なるを思ひて潔よく自殺せしと激賞するに足る。然れども捕虜となるの恥を忍び戦止みて国に帰るの暁更に大に奮発して国の兵制を改革せんとの大量あらば尚ほ賞賛

すべし。然れ共、こは支那の国体として出来能はざるやもしれず。(上田 48-49) ※丁が生き延びて清国の兵制改革を行うことを上田が希望していたことの証拠。

[2月21日] 十九日ノ日本ニ曰ク。英雄ノ涙ヲ丁汝昌ノ身ニ有ラスヨ。(山本 201) ※問題の記事は、無署名文「英雄の涙」(『日本』明治28年2月19日第1面「日本」欄)で、陸羯南の執筆とされる(第5巻36-37)。

[2月22日] 午前九時三十分錦川号船に乗り劉公島に往く鉄棧に上り鉄門より入る扁して北洋水師碼頭と云ふ操場を過ぎ學堂の趾に至る守備隊本部今之に居る観覧医室に及ぶ藥棚あり卓上書籍あり雑誌あり書籍は国人長庵前田安宅子仁が訂する所の本経逢原傷寒大成張氏医通等の翻刻本にして雑誌は英国のLancetなり堂を出で、諸砲台を歴視し丁提督の故宅に入る梅花の初て開けるあり歌を詠ず

軒近くさくやかたみの梅の花／あるじのしらぬ春に逢ひつゝ

むかしうゑし其人あはれ今年さく／この花あはれ世の中

咲出しうめの花社まどふらめ／たちかはりたる人は誰ぞやと(森 248)

※鷗外が劉公島における丁の故宅を実見し、更に追悼歌を詠んでいたことは興味深い。

[2月22日] 二十日ノ日本ニ曰ク。一己人ノ企テタル謀叛到底將明スト思ヘハ、降ル可ナリ。既ニ臣分リアリテハ如何ナル場合ニモ降ハ不可ナリ。(山本

201) ※問題の記事は、(三宅)雪嶺「降論」(伊東中將與丁提督書、丁提督の自殺)) (『日本』明治28年2月20日第1面「論説」欄)で、山本は雪嶺の丁汝昌批判(「私戦に在ては降必ずしも可ならずとせず。[中略]公戦は大に之と異なり、是に於ては降は極めて忌むべきなり、」)を要約している。

[2月23日] 二十一日ノ日本ニ曰ク。清国ノ客將ハ武士道ヲ知ラズ。我国大阪ノ陣、真田等ハ豊臣譜代ノ臣ニアラズ。然シテ事窮スルヤ、奮然赴死。由來人難ニ赴クハ丈夫ノ俠骨。寧口賞スヘキモ、清国ノ客將ノ如キハ只了々ノ貪利漢。タンケツヲ吐キ就クルニ堪ユ。(山本 201) ※問題の記事は、無署名文「支那軍中の客將」(西洋人は武士道を解せず)) (『日本』明治28年2月21日第1面「日本」欄)で、陸羯南の執筆とされる(第5巻37-39)。山本は羯南の「清国ノ客將」批判を前日と同様に要約している。

[2月25日] 杉浦氏にゆく。梅潭その丁汝昌を傷む詩を示されたり。前聯、

一代英雄憐末路 一代の英雄末路を憐む

両関鎖鑰付寒湾 両関の鎖鑰寒湾に付す

とありしを、

一代英雄憐蹢躅 一代の英雄蹢躅するを憐む

卅年功業付潺湲 卅年の功業潺湲^{せんかん}に付す

と改めなばいかにといひしに、即坐に改められき。(依田 第10巻60) ※杉浦梅潭も学海も丁の自殺には同情的だったことの証拠。

[3月1日] [頭欄] 丁汝昌は二百人の書生と共に英国に往き共に学びて帰りの海軍を拡張せしなり(石井 明治28年40) ※石井の丁に対する履歴評価が高かったことの証拠。

[3月3日] 丁汝昌につきて——予(石井 明治28年42) ※[3月1日]の続き。

[3月11日] 北米或ひは布哇移住?—予は丁汝昌に倣ふて二百名の男児を伴ひ而して北米に移住し正義と労働とを以て活動し社会立脚の基本財産を得ん? 否とよ吾党は本営を東洋の中心に置き而して海の東西に運動すべきにあらずや(石井 明治28年46) ※石井の移住殖民策が丁の履歴にも影響されていたことは注目される。

[3月19日] 郷書至る妹の消息中歌あり丁汝昌の身まかりける時

身をすて、幾千の人を救ひけん

こゝろは流石あはれなりけり

丁が故宅の梅花に添へたる我腰折は上に記し、がそを見たるとき

植しあるじに捨られし

のきはの梅もかぐはしき

君が手向の言の葉に

あえてやかくは綻にけん(森 249) ※鷗外の追悼歌に触発されて、“妹”

(小金井喜美子)も追悼歌を作っていたことが判る。鷗外兄妹の追悼歌を一葉の追悼歌「中垣の隣の花のちる見ても／つらきハはるのあらし成けり」(「しのぶくさ」[第3巻(下)767]、異文は「詠草」[第4巻(上)324])と比較してみると面白い。一葉の追悼歌は、それだけを抜き出すと趣意が判りにくい⁽⁴⁵⁾が、実は“丁汝昌⁽⁴⁶⁾が自殺はかたきなれともいと哀也⁽⁴⁷⁾さばかりの豪傑をうしなひけんと思ふにうとましきはた、かひ也”(第4巻[上]324)という前書きが付いている。この前書きは厭戦感情が濃厚だが、後の(日露戦争時の)与謝野晶子の有名な反戦詩「君死にたまふこと勿れ」(『明星』明治37年9月)の先駆と言える。敵将を称える明治期の歌詞には、西南戦争期の(西郷隆盛を称える)「抜刀隊」(外山正一 作詞)や日露戦争期の(ステッセルを称える)「水師營の会見」(佐々木信綱 作詞)があるが、上記に見られる通り、日清戦争期には丁汝昌を称える詩歌が幾つも詠まれていたわけである。

第9節 李鴻章来日・遭難

李鴻章(内閣大学士・総理衙門大臣)が講和全權として来日するという噂は、次

のように早くから出回っていた。

[2月16日] 新聞に、李鴻章全権をもて我に使すべしと。信なりやしらず。(依田 第10巻55)

[2月26日] ○新聞号外に、李鴻章は媾和大使に任ぜられ、去る二十四日天津より北京に赴き、清主に拝面し、二十七日天津にかへり、来月三日天津を発し、日本に来るべしとなり。フォスター氏は又その顧問となれりとぞ。(依田 第10巻61)

[3月1日] 今日の新報紙『時事新報』第2面「雑報」欄「○媾和全権李伯の渡来」に依るに／諸国政府は弥々第三回講和使として李鴻章を派遣する由にて、今度は充分なる全権を与へられたるが如く、又出発地は天津、日は三月三日なるが如し。其会見地は馬関なるやに聞く。(上田 51)

しかし李一行——葉は“かたつふり”⁽⁴⁾(蝸牛)に喩えた(第4巻[上]327)——が漸く実際に来日(門司に到着)したのは3月19日で、翌20日に伊藤・陸奥両全権と下関の春帆楼で第1回会談を行なった。ところが24日、第3回講和会談の帰途、李は暴漢(小山六之助)に狙撃され——葉は小山を“狂客”と呼び、「から桃のあた花とてや一筋に／折たかへたるすさひならまし」と詠んだ(第4巻[上]328)——重傷を負った(そのため日本側は条件を緩和して講和を急ぐことになり、李は4月10日の第5回講和会談から交渉復帰)。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[3月19日] 清国第三回の講和使李鴻章伯馬関に着す。使節も三度目の事とて多分は完全なる全権を委任せられ居るならんとの事なり。随行員として、米国人フォスター氏も来れり。(上田 54)

[3月19日] 李鴻章一行媾和使として馬関に来る、伊藤陸奥両大臣同処にて待受く。(原 223)

[3月19日] ○本日午前八時、媾和使李鴻章の一行、独逸艦二艘にて、我水先案内及三艘の船に警護せられて馬関に着す。フォス[タ]ー・テツトリンクもそのうちにありといふ。[中略]○昨日、黒田清隆に賜ふ勅語あり。朕惟ふ、清使現に來朝の途にあり。その会商の結果いまだ逆め下知す可らずといへども、一たび戦局を収むるに膺りて、特に枢府の詢謀に待つ所多ならん。卿夫れ能く枢密院議長の重責に当り、もつて賛襄の任を全くせよと。又、松方大蔵大臣にも勅語有り。これをもつてみるときは、政府にては和睦の意ありと見えたり。割地償金の事、我望むごとくならば、戦こゝに止めらんも知るべからず。但[中略]その割地の望も、新聞記者などのいふごとくたやすかるべからず。

こゝに於て議論また大に起らんか。とにもかくにも此度の使者の事は容易の事に非ず。(依田 第10巻 67-68)

[3月21日] 今日の新聞紙[『時事新報』第4面「雑報」欄「○李鴻章の上陸」と『時事新報附録』]に依るに「昨日清国使節李伯是我全權大臣と馬関の或る旅館にて初度の会見をなせり」といふ。(上田 54)

[3月24日] 就褥後、在馬関柏田、高田の両名より午後九時五十七分発の電報に接す。／「李氏の遭難に就ては貴族院慰問の意を表しては如何、議会の閉会延びる筈、尽力頼む。」(近衛 19)

[3月24日] ○李鴻章会見所よりの帰途兇漢の為に狙撃せられ面部に負傷せり。／去二十日に李は我辨理大臣に面会し、休戦の申込をなしたるも、我より提出したる条件に関し彼廿四日まで会見の延期を求めたり、此間に於て北京に電訓を求めたるならん、而して本日の会見に於て負傷せるなり、彼は余天津在勤中懇意にしたれば私情に於て尤も気の毒に思ひ、見舞の電報を送りたるが、我邦に屢々此類の兇漢を見るは歎息の外なきなり。(原 223) ※原が「天津在勤中」李と「懇意にし」ていたことは興味深い。

[3月24日] 此日、下関に講和談判中なる清国大臣李鴻章、出る途中にて、何ものともしらず群中よりおどり出て、轎丁の肩を押へ、短銃を輿中に向て一発せしが、幸にして眼下を擦りて深く入らず。鴻章は手に小巾をもちてその創をおさへ、轎丁をうながして引接寺いんじょうじの旅館にかへれり。一時馬関の騒動大方ならず。されど兇人は憲兵阿部某・警部新城某、直にこれをとらへたり。兇人は身に木綿の縦縞の袷衣を着し、肌小山に紀州毛布の襦衣を着す。群馬県邑楽郡北大島村四十二番地平民幸八郎の子にして六之助といふ。本年二十一歳なり。本月十三日東京を發し、広島に着し、そののち長府に着して、今朝長府よりこゝに至れり。狙撃の地は、下関外浜町二十一番屋敷江村仁太郎あらもの 喬 道の宅前といふ。事、広島に聞ゆ。皇帝・皇后大に驚き思召して、侍從武中村某(ママ)に命じてこれを慰問せしめらる。(頭欄)「李鴻章為兇人所狙撃、不死[李鴻章兇人の為に狙撃せらる。死せず]」(依田 第10巻 70)

[3月25日] 昨日の号外[『時事新報号外』明治28年3月24日]に／李鴻章伯は二十四日午後我全權との会見を終へたる後帰途に於て、一兇漢の為に狙撃せられ面部に傷を受けたり。但し生命に別条なし。(上田 55)

[3月25日] ○—李鴻章氏の負傷 につき余は第一に如何なる感情を起せしや。余は実に思へり。あゝ彼兇漢は日本の名誉を毀けたりと。何となれば今西洋の諸国が日本は文明強国の中に仲間入りせんとし居る所なるが故に、

少しにても悪き事あればさまで咎むるにたらぬ事までもやあ虐殺だとかやあまだ文明の皮をきた丈で身は野蛮だとかいひてしきりにけなしたがる時にて、これでもやきもちといふ人情なれば致方なしとして、吾人、当人たるものは充分に戒心して之をいはれざる様にしてこそ本当の日本民族なり。然るに彼は敢て此心掛……已でに輿論となれる此心掛をもそちのけにして此様な不都合千万なる事を仕出かすとは、第一李君にも気の毒なりし。実以て欧州人に日本をまだ開けずといはしむる種をつくるといふものなりと此様に思ひたり。而るに翌日になり新聞を見るに、世間の諸団体等も余と同様の感情をもちて之を表明するために慰問状を送るもありとか。してみるといよいよ兇漢は輿論に反したるものなり。(三月二十五日)(上田 97-98) ※上田の“文明”対“野蛮”の構図は、上田の愛読紙『時事新報』を創刊した福沢諭吉の脱亜論、特に直近の無署名(諭吉)文「日清の戦争は文野の戦争なり」(『時事新報』明治27年7月29日第2面「時事新報」欄)の明白な影響下にあり、また襲撃が「国益を損ねた」とする見方が一般的だったようである。

[3月25日] 李鴻章〔大清帝国欽差頭等全權大臣〕、馬関ニ狙撃セラルノ報アリ。市人大ニ驚クノ景況アリ。(尾崎 67)

[3月25日] 昨日は日曜日、吾れ当直、終日国民新聞社楼上に在り。李鴻章狙撃の飛電馬関より来る、号外発兌のため夜十一時漸く退社、十二時帰宅す。李已に傷く、今後の形勢果して如何、李にして男子ならば必ず此の事を口實の一端に置き略略の一助となすの卑劣行為を試みざるべし。されど彼れは窮鼠なり。(国木田 279) ※独歩が李を“窮鼠”と見ていたことは興味深い。

[3月25日] 面会 金山尚志 李氏遭難に付慰問の電報を發しては如何との事同意なれども可成貴族院全体にて議長より發せられたしとの意を述べ置く 本多正憲 同上の件華族の發遣もしくは總代出張の事を会館長に申通し又議院形代を差出すの議を議長に提出する事を懇話会と打合せ事とす / [中略] / 蜂須賀、清棲、曾我の名前にて、李鴻章遭難の件に付相談の為、華族会館に参集すべしとの報あり。午後三時出頭し、右に付天機何總代の事、李氏慰問の事等を決す。(近衛 19)

[3月26日] 天皇陛下は李鴻章氏来朝につき、充分警戒を加へたりしにも拘らず、今度の事変ありしを遺憾とする旨詔勅を發せられたり。(上田 56)

[4月2日] 来状 華族会館 李鴻章慰問在後 (近衛 22)

第10節 日清休戦条約調印

3月30日、日清休戦条約(台湾・澎湖諸島を除く)が調印された。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[3月30日] 休戦條約馬関に於て調印成る、本日より廿一日間なり、盛京、

直隸、山東方面とす、最初清国より無條件休戦を申出たるも、我全権は大沽、天津、山海関を我兵をして占領せしめ、天津、山海関の鉄道を我兵の使用に委し且つ休戦中の軍費を支辨するの條件を提出したるに、去廿四日の会見に於て清国全権は之を断り、休戦の請求を撤回することとなりしが、帰途李負傷の出来事を生じ、之が為めに談判の進行を妨げたるが、世界の同情に帰せんとするの虞あるに因り今回無条件休戦を承諾することとなれるなり。在馬関陸奥大臣に内信を送る。(原 223)

[3月30日] 休戦の約あり。三七日間。(頭欄)「休戦三七日間の約あり」(依田 第10巻71)

[3月31日] 今日の新聞[『時事新報附録』]に／ 始め我全権は李全権の休戦要求に対し、担保として山海関、太沽砲台の引渡しを申出せしが、今度の事変にて平和条約談判の進行を妨碍せしを以つて盛京、直隸、山東三省に於て無条件にて休戦を許す事に昨日談判整ひたり。期限は二十一日間にして四月二十日の正午に切れるものとす、といへり。余は此に対し、大に不平を感じたり。何となれば李伯の負傷は唯一私人の天災なるに、日清戦争は公の国際事件なればなり。況んや、我第二軍は已でに太沽天津に進むの時機熟せしとの事なるに於てをや、此に至りて兇漢益々憎む可し。然るに彼は同じく三十日山口にて無期徒刑をいひわたされたりといふ。余はかれをころしたく思ふなり。(上田 56-57) ※“ころしたく思ふ”程の憤激は、他の日記には見られず、珍しい。

[3月31日] 昨日清国休戦条約成リタルノ報知アリ。安田善次郎〔実業家〕へ書面遣シ、朝鮮銀行意見書ヲ封入ス。(尾崎 67) ※朝鮮銀行の件で尾崎と安田が繋がっていたことは注目される。

[4月3日] 神武天皇祭ノ式ヲ行ヒ、威海衛ヲ話ス。[中略] 今日役場ニテ休戦条約ヲ読ム。休戦々々。下り坂ト見ユ。(山本 206) ※休戦条約は、例えば『日本』では明治28年3月31日に『号外』として報道され、4月1日第2面に再録されたので、山本が当日(3日)発行の新聞を読んでいたとは限らない。

第11節 日清講和条約(下関条約)調印

日清講和条約(下関条約)は、調印前から話題になっていた。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[4月1日] 馬関に於て我より媾和条件を示せりとの電報あり、朝鮮の独立を認むる事、金州半島及び台湾を割譲する事、償金三億萬兩を拂ふ事、通商上の利益を各国同様に我に與へ且つ多少我に譲歩する事なりき。(原 223)

[4月11日] 講和火急。僕ノ先見ニテハ平和ト見タ。(山本 207)

[4月12日] 此日ノ新聞ニ、日本ノ支那ニ対スル請求ノ五大ヶ条ヲ上ゲタリ。

第一 永久ニ朝鮮独立ヲ是認スルコト。

第二 二百万弗ノ償金ヲ払フコト。

第三 「ポートアサー」「ホルモサ」ノ両港ヲ日本ニ渡スコト。

第四 日本為ニ支那ノ内地ニ通商貿易ヲ開クコト。

第五 戦後新条約ヲ締結スルコト。(留岡 470)

[4月12日] 役場ニテ [中略] 日暮 [中略] 講和ナリタルヤヲ聞ク。(山本 207)

[4月16日] 下ノ関ニハ清国講和使ノ乗船公義禮裕ノ二隻碇泊スルヲ目撃ス(是ヨリ先三月十九日清国頭等全權大臣北洋大臣直隸總督李鴻章 [中略] 以下百二十五人公義禮裕両汽船ニ乗リテ来ル)(亀井 613)

[4月16日] よに入て号外来る 平和談判と、のへり 委細⁽¹⁶⁾ハあとよりとあり(樋口 404) ※一葉が「玉のをのよりあはんとハおもひきやたえはたえよとむかひしものを」・「つるきたちおもひたちし玉のをのよりあふ友にも逢ひにける哉」(第3巻 [下] 688:「うたかた」)という短歌二首を詠んだのは、この頃。

条約が実際に調印されたのは、第7回会議の開かれた4月17日。その内容は、朝鮮の独立承認、遼東半島・台湾・澎湖諸島の割譲(この新領地を一葉は「敷嶋のやまとますらをにえにしていくらかえたるもろこしの原」と詠んだ[第4巻(上) 350])、賠償金2億両支払い、欧米並みの通商条約締結、威海衛保障占領などであった(5月8日に批准・発効)。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[4月17日] 日清の平和談判調停せりとの号外来る(石井 明治28年77)

[4月17日] 今日新聞紙号外[『時事新報号外』]来る。曰く「講和談判まとまり、遼東地方、台湾を割譲、二億両の償金を条件として今日午前にまとまりたり」と。／ 平和条約の条件は此他尚ほ、通商上の便利を我に与へ、即ち開港の数をまし、無法の苛税を廃し、我々は最大の裁判権と税権を有し、彼は裁判権を有せず、税権は有限とする等の条項あり。(上田 59)

[4月17日] 講和談判成りたりとの報あり、(国木田 285)

[4月17日] 馬関に於て日清両全権の間に和約調印成り、条件は償金二億萬兩に減じ、盛京省方面の区域を大に減じたるも他は最初の我提議の通なり。／ 李鴻章一行馬関を出発して帰途に就き、我全権伊藤、陸奥は明日廣島に帰る。(原 223)

[4月17日] いまた談判の後報来らず(樋口 404) ※“注意をひくことには、

二十七年七月末以後二十八年四月までの空白が、日清戦争の期間に相当しており、この四月に書き始められた『水の上日記』は、和平交渉成立の記録で始まっている。／[中略]／一葉にしても、この戦争について何一つ記録しようとしなかったほど、冷静ではなかったろう。それにしても、戦争終結による平和実現を待ちわびて、「十七日 いまた談判の後報来らず」と記しながら、新聞が條約調印の詳細を報じた十八日の記録が、これに触れていないのはなぜであろうか。／[中略]／詠草 42 - 5、6、7、8には、戦死者やその遺族や戦場兵士の郷愁を思い遣った作が書き入れてある。そして同じ詠草の23と感想・聞書 10『しのふくさ』の末尾には、劉公島に捕虜として拘留されていた清国艦隊指揮官丁汝昌の自殺に哀悼を表した作が加えられている”（樋口 411-12）。

[4月17日] 馬関の我両全権伊藤・陸奥の二大臣、清国の李鴻章・李經芳等と会議いよへす、みて、十七日午前十時、各礼服を着して終りを告ぐ。（頭欄）「割地、償金、存韓」さて媾和の条件は、第一、土地を割く。盛京省の一部、營口より牛莊を経て遼陽に出て、連山より鳳凰城を経て、朝鮮の義州の端にいたるまでを経界とし、渤海・黄海岸一帯の地及澎湖島・台湾島。第二、償金二億両、五ヶ年賦。第三、朝鮮の独立を認むる事。支那人の治外法権を撤去する事。其他商業の事。同日、李鴻章の一行は馬関を去りて、公義・礼裕の二船にのりて支那にかへる。これ十七日午後三時三十分なりといへり。（依田 第10巻77）

[4月18日] 媾和成れりとの風説船中に行はる。（正岡 87）

[4月18日] 今晩[中略]媾和成ルヲ聞ク。日本停止。（山本 208）※“日本停止”は誤解を招く。『日本』が発行停止となったのは16-17日で、18日には解停されて発行を再開している。奇妙なのは、（誤植のためか）15日と18日の号数が共に2050号になっていることである。

[4月19日] 九時四十分仁川港ニ着シ同所兵站部ニ請ヒテ其撮影ノ為メニ上陸ス[中略]兵站司令郎官舎前ナル揭示場ニ貼スル文ニ曰ク

日清両国間ニ仮定約整立シ從來ノ休戦ノ期ヲ来ル五月八日午後十二時迄延長セラル四月十八日午後二時旅順口総督府

ト一見始メテ媾和ノ成ルヲ知ル（亀井 614-15）

[4月20日] 英魯同盟して支那を援け我軍と戦ひしことを夢む（石井 明治28年80）※「三国干渉」の予兆。

[4月20日] ○一我新版図の面積は台湾が3340方里余、澎湖其他属島が30方里許り、盛京省はよく分らざれども2566方里位、然るときは合計5880方里位なれば北海道本島より880方里多し。又／○一償金は二億両（一両我一円四十銭許り）即ち二億八千万円なり、而して現今我国にては日本銀

行の準備金七千万円と他全国に散在せるものと合するも、正貨は一億円を出で
ざれば、つまり硬貨の額が今迄より殆んど三倍だけ多くなる訳なり。(以上二
件四月廿日)(上田 101) ※いかにも将来の経営経済学者に相応しく、計算が緻密。

第12節 「三国干涉」

4月23日、ロシア・フランス・ドイツは、日本に対して清国への遼東半島返還
を要求した。いわゆる「三国干涉」である。このことは、諸日記に次のように記載
されている。

[4月23日] 独、佛、露の三国より覚書^{メモランドム}を出し、金州半島を永久日本領とな
すは清国の首府を危うし、且つ朝鮮の独立に「イルジオン」をなすものに付
抛棄あらんことを勧告すと云ふに在り。(原 223-24) ※さすがに原の情報収集
は早い。

[4月25日] 四月二十日晚の夢……実現せられん有様なり 若し然らんには
一大事変なり 然る時は我国は北米及び仏国と同盟すべし支那は独乙英国露
国と同盟すべし(石井 明治28年87) ※「三国干涉」に対する具体的対抗策として、
日・英・米・伊の四国同盟が画策されたことはあったが、日・米・仏の三国同盟策は注
目される。

[4月25日] 四月二十五日遼東返還の前に

やりさきで取りたる土地ハやりさきで またやりとりの外ハあるまじ
我むねを定めねらいて放ち矢の 当りはづれの身ハせめにあり(田中
449) ※田中が干涉三国との開戦を覚悟していたことの証拠。

[4月26日] 四月二十六日、東京ニ而三国干涉ありと云ふ事をきゝて

やりさきでとりたる土地ハやりさきで やはりやりとりとるの外なし(田
中 450)

[4月27日] 此場合に於ては我国は徹頭徹尾衝突し来るところの英なり露な
りと激戦すべし…成程初めは敗れん……然れども必らず後に大勝利を得べし
(石井 明治28年89) ※石井も開戦論者だったことの証拠。

[4月27日] ○(頭欄)「星岡小集」[中略] 山王公園の星岡茶寮に至る。[中略]
此日きく、魯西亞国、我清国の和を入れて、その盛京省の地を取りしことを
もて、これを妨げむと謀るよしの風聞あり。これが為に新聞の停刊せられし
もの多しといふ。その真偽はしらざれども、実にこれあらば、魯国の我を輕
蔑すること甚し。彼その強大をいたしたるものは、何のゆへぞ。皆隣国を并
吞したるにあらずや。己はこれを為し、人の所為を妨ぐ。その義いづくにか

在る。況や我清と戦ふとき局外中立を布告したるに、今又割地の不可をいふ。これ自ら矛盾するに非ずや。(依田 第10巻 82-83)

[4月29日] 露国干渉は愈々事實となりぬ。人心之れがために激昂せるが如し、国家の前途愈々多事ならんとはする也。(国木田 287)

[4月下旬] 今外国二事を構ひたる繁忙の時節、前途遠く独り物語りに取り定めて、永々予言などをなしたりとて、何んの益もなし。戦争ハ物語りより勝つにあり。戦争ハ予言より目前の勝敗なり。時機に不適當の予言ハ無益なり。(田中 428-29)

[5月1日] 露国との形勢迫まれるが如し、若し破裂して一大決戦を惹起し来らんか、實に世界史上の一大變動たらずんばならず。(国木田 288)

[5月1日] ○世に兵備を云ふ者ハ先行政の整備を云ふべし。イカニ軍兵備るとも連勝の戦ありとも、文官今日之如く軟弱二面ハ結局失敗せんのみ。(田中 442) ※兵備よりも政備という姿勢は、いかにも政治家の田中らしい。

[5月1日] 露、独、佛の覚書に対し回答せり、本件に付今日まで三回陸奥大臣に意見申送る。(原 224)

[5月5日] 夜独り新聞ヲ読ム。露国ノ干渉驚キタリ。体カビリ〜セリ。当局者ノ苦心ヲ察シ、乍去、正義ニ敵ナシ。ヤルヘシ。徒ニ讓歩スル勿レ。(山本 210) ※山本も開戦論者だったことの証拠。なお、山本が読んでいた記事は、具体的には「●露清の密約 ((北清日々新聞より抄譯))」(『日本』明治28年5月2日第2面「雜報」欄)などで、東京から地方への配送に伴う時間差を考えると、山本が当日(5日)発行の新聞を読んでいたとは限らない。

[5月6日] 国家多難なるが故に實際的活動を吾頻りに望めども亦た一方を顧みて詩人の職を重んず。／断乎吾れ詩人たる可きのみ。(国木田 290) ※独歩の場合、俗人と詩人との二者択一では、結局後者が(少なくとも理念的には)勝利した。

[5月6日] ○新聞号外の配達あり。明七日を期して、在東京の各大臣及枢密顧問官等、尽く西京の大本營に召集せられ、軍国の大事を議せらるゝといふ。魯国無礼の要求に接しての返答としられたり。是国家の大事たるべし。しらず、魯人の要求はいかなる事ぞ。風聞によれば、満洲の地一寸も支那をして日本に割き与えらるべからずとの事といふ。両国の戦は両国の間に起れり。何ぞかれのあづかりしる所ならむや。(頭欄)「果使魯人有此言、我且欲問彼、黑龍江外數百里、波蘭數千里、不知何國奪而取之、魯而取之、嗚呼魯之貪暴非一日、不一戰懲之、安足挫發焉之志哉、唯男子宜三食糜其一、以充饑糧、百丁拔一以編兵勇、不粉蜜彼虜不可止也〔果して魯人をして此言有らしめんか、我且に彼に問はん」と欲す、黑龍江外數百里、波蘭數千里、知らず何れの國が奪ひて之に

抛り、脅して之を取りしや、嗚呼魯の貪暴は一日に非ず。一戦して之を懲らさずんば、安んぞ狡焉の志を挫くに足らんや、咄、男子宜しく三食に其の一を廃し、以て糠糧に充て、百丁に一を抜きて以て兵の勇なるを編むべし。彼の虜を粉塵せざんば止む可からざる也」(依田 第10巻 86-87)
 ※学海も開戦論者だったことの証拠。特にロシアの“無礼”・“貪暴”・“狡焉”に対する義憤は激しい。

[5月7日] 戦争！ 戦争！ 吾は戦争を歓迎せん。苦戦を歓迎せん。討死すらも辞せじ。(国木田 291) ※独歩も開戦論者だったことの証拠。

第13節 「三国干涉」受諾

5月4日、伊藤内閣は遼東半島返還(全面放棄)を閣議決定し、5日に日本はロシア・フランス・ドイツに遼東半島返還を伝えた。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[5月6日] 露、独、佛に回答して悉く其勧告を諾せり。駐露公使西徳二郎訓令を奉じて露政府に金州半島を存して他は返還すべしとの提議をなしたるも彼固く執りて諾せず、依て京都大本営に於て種々協議の結果、我兵力は此上三国と戦ふ事能はずと云ふに付已むを得ず其干涉を容るゝ事となせるなり、余は列国会議の意見ありしも陸奥外相は斯くては将来東洋問題に歐洲の干涉を免がれずとて之を不可とし、又清国に対する問題と露、独、佛に対する問題を混じて媾和條約を破壊修正せらるゝの虞あるを以て、彼此両問題を分離して速かに解決するを我に利益ありとなしたるなり。(原 224) ※陸奥宗光の外交判断が披瀝されている。

[5月7日] 午後外務省ニいたる、日清講和事件之事ども原〔敬〕局長ニ聞く、魯国の干涉もまつ円やかに事すみ云々、新領地をは清国へ返す赴ニ聞く、〔後略〕(高瀬 81)

[5月7日] ○薄暮散歩の際に杉浦鋼太郎にあふ。鋼いふ、魯国割地の事を非として我に向て無礼の言あり。海陸の將士大に怒り、すでに戦に決せんとせしに、仏國中裁して、我一步をゆづり營口・遼陽・海城等の地をとらず、独金州半島の地を収め、償金の三万を倍して六万とすべきよしに決定せりと。(頭欄)「和睦返地」魯国の不遜は惡むべしといへども、今戦を開くは我に於て損あり。利害をもていふときは満洲広漠の地は守るに大軍をもてすべく、その費もまた莫大なり。恐くは得る所その失ふ所を償ふ可らず。されば此中裁は全く損にあらざるべしと也。されども両帝すでに批准のすみしのち、日本の厚意として、かれにかへし与らるべきものにして、彼も還されたる謝儀として、三億万円

をおくるものなるべし。これ我国の面目をおもひて、仏人が中裁せしところとしらる。余、媾和条約の初に、杉浦梅潭の宅にて、その孫俛一に、こたび我が要求は割地にあるべし。されども一たびとりてのち厚意をもて彼にかへし与ふに至るべきかといひしが、果して此事に及べり。偶然の先見ならんか。そは彼国を滅して我有とするにあらざれば、和交を全くすべし。和交を全くせんには、彼をして永く面目を失はしむべからず。面目を失はしめざるには、その地をかへすにあれば也。(依田 第10巻89-90) ※この時点では、学海は開戦論から和平論へと軸足を移している。

[5月8日] ○(頭欄)「事体矣」新聞には異なる事も聞えず。唯尾崎学堂が京師にありて、人に向ひ今は萬事休せりといひしことあり。学堂は過激の人なれば、魯国と戦ふべしと主張せしにやあらん。しかるに政府は戦を欲せず。遼東の地を返すに決せしかば、斯くはいひしなるべし。(依田 第10巻90) ※対外硬派の閣将だった尾崎行雄は、「三国干渉」受諾を大屈辱と受け止め、憤慨を洩らしていた。「時事を論じて挙国の忠愛者に訴ふ」(313-34)等参照。

第14節 日清講和条約批准書交換

日清講和条約批准は、事前から次のように話題になっていた。

[5月1日] ○本日号外の報に、清国皇帝は媾和条約の批准を畢れり。本月七日には滞ることなく、彼我交換を終るべしといへり。独・英・魯・仏、三国同盟の交渉非難説はいかん。魯・英の二国は我が勢を嫉みて、みだりに我清国の割地を非とするはさる事なれど、仏国の我に背くは心得がたし。我勢を得るときは、安南の地の利害にかゝるゆえにや。独国に至りて絶て東洋の利害ありとも見えず、解しがたし。訛言にもやありつらめ。(依田 第10巻84)

[5月4日] 夜神保と歌仙一卷を物す

[中略]

日清の媾和談判まとまりぬ 壽

足の小さい妾のうけやど 湛(森 250-51) ※“壽”は神保で、“湛”

は鷗外。“足の小さい”とは、纏足のこと。

[5月4日] 清帝条約を批准すとの報至る(上田 62)

[5月4日] 本日清国批准之噂を聞く、[後略](高瀬 81)

[5月5日] ○此日、清帝盟約批准ありしよし、公報達せりといふ。独・魯・仏、三国同盟の事、これより後いかに結局するぞ。余、初より為さざればやむ、為さむには終るところまで為さざれば止むべからずと思へり。(依田 第

10 卷 85)

[5月8日] 條約交換も今日に迫りて復た休戦の噂など漏れ聞ゆ。心安からぬ事多かり。杖を携へて郭上に登り〔金州〕城内城外の景色など恰く見渡すに杏花は全く散り盡くし今は桃梨菜花など誰が為とは知らで盛を競へり。原頭の草色さへ漸く深うして亡国の地とも知らずやあるらん。国破れて山河在りとそゞろに口ずさまれて哀れなり。(正岡 95-96)

芝罘で日清講和条約批准書が実際に交換されたのは5月8日。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[5月8日] 午後十一時半芝罘に於て條約批准交換を了せり。初め三国干渉落着せざる為めに五日間の猶豫を求め我之を許したるも、三国の問題も解決せしに因り俄かに期限通交換を了せしなり。此交換は伊東已代治全權委員として芝罘に赴き、彼よりは伍廷芳委員として来りしが、伊東は其処辨の功に依りて交換を了したるが如く信じて帰朝せし様子なるも、實は三国問題解決せしに因り本省と李鴻章との間に電信往復の結果、李は伍に訓令して交換せしめたるなり。又已代治は近頃伊藤に嫌はれて用られず、陣奧外相の周旋にて媾和に近づきたる頃始めて用られたるなり。(原 224) ※伊藤博文と伊東已代治との人間関係に触れている点が興味深い。

[5月9日] 休戦ハ昨日ヲ以テ満期ト為ル是ニ於テ兩國ノ談判和戦孰レニ決セシカ出征軍ヘハ早く既ニ電報ノ達セシナルベシ余等此地ニ到着セシヨリ十有九日ヲ為ス事無クシテ徒ニ日子ヲ費セリ和戦其決スル所ニ從ヒ余等亦進退ヲ決セサルヲ得ス因テ宮崎幸磨佐々布充重ヲ管理部ニ遣ハシ部長佐本壽人氏ニ就キテ問フ所アラシム佐本氏曰ク想フニ和議整ヒシナルヘシ然レトモ未タ報告ニ接セスト然ラハ則報告ヲ俟テ進退ヲ決スヘシト歸テ其旨ヲ告ク此日余ハ橋元文三森金次郎右衛門春日定夫ヲ從ヘ北門外ナル故通譯鐘崎三郎同山崎羔三郎同藤崎秀三氏ノ墓碑ヲ撮影ス三氏ハ我第二軍ノ花園河口ニ上陸スルヤ直ニ敵情偵察ノ大任ヲ承ケ身ヲ清人ニ仮装シ深く敵地ニ入り不幸ニシテ土民ニ捕ハレ金州副都統衙門ニ於テ詰責ヲ受ケ終ニ刑セラレテ惨死ス我軍占領ノ後碑ヲ此所ニ建テ、哀悼ノ意ヲ表シ以テ其ノ忠魂ヲ吊慰セラル三氏々名皆崎字アリ是ニ於テ其所ヲ号シテ三崎山ト稱シ別ニ此ノ三字ヲ大書深刻セシ碑石ヲ建ツ(亀井 630-31)

[5月9日] 講和なれりとの報あり。(正岡 96)

[5月9日] 条約批准交換の期を一週間延られたり。よて、清の李経芳、我伊東已代治の両大臣、芝罘に滞在すといふ。国民新聞[第2面「交換と詔勅」]いふ、

平和条約交換の、ち重要なる詔勅発せらるべしといふ。[中略]○(頭欄)「条約交換」

日本号外に、清国政府は五日間の延期を取消し、昨夜十二時批准交換を終り、伊東全権は同夜旅順にかへれりとの報あり。東洋これより多事ならんとあり。日本新聞は我きく所の退讓説と同じからざるに似たり。なほ数日を経るにあらざればしりがたし。(依田 第10巻90-91)

[5月10日] 此ノ日復タ宮崎幸麿佐々布充重ヲ近衛師団司令部ニ遣ハシ参謀河村秀一氏ニ就キテ媾和ノ成否ヲ問ハシム河村参謀曰ク本日媾和談判諸ヒタル旨通報アリト聞ク是ヨリ先四月十七日日清両国全権大臣ノ間ニ於テ媾和ノ議諧ヒ乃チ條約批准交換ノ期ハ調印ノ日ヨリ三週間ト為シ其交換ノ地ヲ芝罘ト定メ清使ハ其日午後二時乗船帰国ノ途ニ上レリト而シテ我伊藤陸奥ノ両全権大臣ハ翌日廣島ニ帰り頗末ヲ奏聞ス(亀井 633-34)

[5月10日] 講和成り萬事休す。一行七八人金州を辞して柳樹屯に向ふ。悉く本国に帰らんと成り。兵站部の宿舎に寝ぬ。をさへ牢屋にも劣らぬ所なり。(正岡 96) ※子規の潔癖感が良く表れている。

[5月10日] 和親成れりと云ふ報に接す(森 251)

[5月10日] ○八日夜半条約交換、芝罘に於て我伊藤大使と彼全権との間に調印済となる。／○此頃、京都に於てしきりに大臣、枢密顧問、軍人等の間に会議あり。或時は午前中に於て開かれ、或時は夜半に亘り、山県將軍を旅順口より呼びかへし、東京林次官と長文電報頻繁なるなど、何か一事變の萌しあるかの如く見ゆ。(上田 62)

[5月10日] ○日本号外に、九日午後六時卅五分在旅順より打電に、伊東全権大臣は七日朝芝罘に達し、午後五時上陸す。清国よりは旅館を設け、護衛兵を配置し、小蒸汽船を出して迎へたり。伊東は乃ちヒーチホテルに入り、此処にて談判を開く。彼の正使は伍延芳、副使はレンホウなり。談判は翌八日にわたり、論難五回に及ぶ。その夜十二時に至り交換全成れり。約款はすべて馬関条約の通りなり。伊東は今朝四時芝罘を發し、十一時半此処に入り、惣督官に謁し、横浜丸にて直に帰朝すとありて、その末に消したる文四行あり。これをすかしてよくみ、左の如し。芝罘にては露艦十二隻、独艦二隻、戦艦準備を為し、其の他仏・英・米船各一隻あり。礼砲を發せしは英・米の兩三艦のみと見ゆ。これにても目今の形勢大方は推し量らる。(頭欄)「露・独の形情」(依田 第10巻91)

[5月11日] 昨夜日章旗ヲ夢ム。今朝媾和互換ヲ聞ク。(山本 211)

[5月12日] ○占領地盛原省の部分を支那に返す事に決したるもの、如し。

蓋し魯国以下の干渉の結果なり／付ては今度出ずべしとの噂ある占領地返却に関する詔勅に於ては十分事實を明記して露国等干渉の結果遂に此の大屈辱を被るに至り(し^又たる^説)事を全国民に宣言するを急務とす。との意見を起しぬ。之れを同志の人に通ぜんと思ふ也(国木田 292-93) ※独歩が「三国干渉」受諾を“大屈辱”と見ていたことの証拠。

[5月13日] 在清国芦澤より書状来る 日清媾和と、のへれ^(は)ハヤ^(が)かて無事帰国なす^(べ)く当時ハ金洲附近ニ宿營のよし通知也(樋口 422-23)

[5月15日] 当日は条約批准交換の祝意を表する為め学校は八時より休業となれり。(上田 63)

[5月23日] 我門出は従軍の装ひ流石に勇ましかりしも帰路は二豎に襲はれてほうへの體に船を上りたる見苦しさよ。大砲の音も聞かず弾丸の雨にも逢はず腕に生疵一つの痛みなくておめへと帰るを命冥加と言はゞ言へ故郷に還り着きて握りたる劍もまだ手より離さぬに畳の上に倒れて病魔と死生を争ふ事誰一人其愚を笑はぬものやある。さりながら天は完全を與へず浮世は圓滿を妬むものと思はゞ造化の掌中に輾転する吾人の命運を独りもがきたりとて為んかたもなかるべし。まして廻り合せの悪きを思へば我のみにもあらざりけり。一年間の連勝と四千萬人の尻押とありてだに談判は終に金州半島を失ひしと。さるためしに比ぶれば旅順見物を冥途の土産にして蜉蝣に似たる命一匹こゝに棄てたりとも惜むに足ることかは。(正岡 97-98) ※子規の従軍総括。

[5月23日] 媾和

今更になにをむやくやおもふかな 斯くなりぬべきことをしらずや(III 中 434)

第15節 遼東半島還付に関する詔勅

5月10日、遼東半島還付に関する詔勅が出された。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[5月10日] 遼東還附ノ報出征軍ニ達スルヤ忽チ飛語アリ露艦我凱旋軍ヲ黄海ニ抗拒セントストスノ如キノ飛語ノ往々伝播スルハ蓋シ陣中ノ習癖タリ亦怪ムニ足ラザルナリ(亀井 648)

[5月13日] 本日清国ト媾和条約ノ發布アリ。且詔勅アリ。露独仏三国ノ慫慂ニ依り、満洲割譲地ヲ彼へ返還スベキノ論アリ。(尾崎 69)

[5月13日] 日清媾和條約公布あり、同時に遼東牛島還附の詔勅出づ。(原 224)

[5月14日] 昨日遼東半島還付の詔勅出づ。日清条約公にせらる。今日東京市中は国旗を出して祝意を表す。(上田 63)

[5月14日] 昨日愈々遼東半島返還の詔勅出でたり。／是れ吾国外交史の大失策なり。／歐洲諸国が東洋に干渉するの端是れより発せん。／露国が日本を侮るも亦たこれよりせん。／日本膨脹史もしばらくは中止なるべし。／嗚呼世界国民の歴史は如何なりゆく可きか。(国木田 294) ※依然として独歩は「三国干渉」受諾に否定的で、今回は「吾国外交史の大失策」と評している。

[5月14日] 清国と媾和後の詔勅、今日降り。独・魯・仏三国の説を納れて、遼東の地を尽く清国に還附すとの事なり。此事実には不平なれども、又退きて考ふるに、力を量り勢を視て事に従ふは、有国の長計なり。あながち勢に誇り勇を恃むことのみ義といふ可らず。○松駒連の幹事野田安来りて、岩井久米八が川上の約を背きて横浜におもむきし事をかたる。ものがたり此度の事に及びしに、安は不学のあらしをなれども思の外に見識あり。三国の説を納れさせ給ひしは実に恐れ入たる勅命なり、清国との戦にて連勝とはいへ莫大の費あり、国内疲弊せずといふ可らず。今又この大事起なば、人民の苦いかばかりぞ、それを知らせ給ひてかく計らせ給ひしは実に仁政といふべしといひき。天下の形勢より論を下さず、疲弊の禍より言を起す、又一見識ありといふべし。かゝるやつはまた有りがたき人物なるべし。(依田 第10巻92-93) ※学海の立場は、以前から現実的解決策に移っていた。

[5月15日] 早朝役場ニテ、大詔ヲ読ム。ア、露国。叱々。(山本 211)
※大詔は、例えば『日本』では(恐らく5月13日に)『号外』として報道され、5月14日第2面に再録されたので、山本が当日(15日)発行の新聞を読んでいたとは限らない。

第16節 明治天皇還幸

5月30日、明治天皇が広島から東京に還幸した。このことは、諸日記に次のように記載されている。

[5月29日] 新し橋凱旋門を見に行く。同門は長さ一町許り全体材木を組み骨となし、之に杉、檜、桤等の葉を以て飾をつけたるもの、最も莊嚴なる形にして今現に飾付け中にあり。人の之を見ん為めに行くもの甚だ多く、往来雑繁なり。／ 明日は天皇陛下還幸により、明後日は皇后陛下還啓により学校は休業なり。(上田 66)

[5月30日] 向ふ処はいづれ…… 今日は如何なる日ぞや、各戸日章の国旗を揚げ、提灯をつるせり……のみならず道側、或は大国旗を立つるものあり。

或は道を蔽つて国旗と連隊旗とを交叉したるあり。みな其下に奉祝の意を顯す。又某町中と額す。明治二十八年の五月三十日、果してかくも祝すべき日なるか、然り此日は実に我文武賢聖の天皇陛下が東京に還幸せらるゝの日なり、去年九月聖駕西に向て走りしより以来此に九ヶ月なりしを戦争目出度勝に帰して平和の条約成りしによりて、陛下は東に帰られたるなり。果して然らばは我國民が義務として大祝大賀せざる可らざるの秋といふべきなり。而して余輩が相携へて共に發せしも亦是意にして、即ち聖駕を奉迎せんとしたるなり。往來はみな三々五々、美しき衣を着けたる人々のしげ／＼しく新橋、虎の門方面に向ふもの引きもきらず。議事堂の裏に至れば人の群集堵をなし、をしあひへしあひ巡查警部にとがめられ叱せらるゝ、事常にかくの如き場合にあるが如くして、更に甚だしきを覚ゆ。又多くの国旗を何々会、何々学校などぞめ出したる大旗と共にたて、整列するものありし、余等は十二時より二時まであちらこちらにもまれつゝ、をされつゝ、みな汗を流して待ち居りしに、やがて聖駕は来ませり。万歳の声は四方に起り、〔後略〕（上田 66）

〔5月30日〕 三十日午後二時東京新橋停車場ニ着御在ラセラル皇族文武諸官員貴族衆議兩院議員等奉迎スル者場中ニ充滿ス又横濱港碇泊ノ軍艦及ヒ内外船舶ハ皆滿艦飾ヲ為シ軍艦八重山ハ祝砲ヲ放テリ其レヨリ鹵簿第二公式ヲ以テ威儀肅々トシテ宮城ニ還御在ラセラレタルハ二時四十分餘ナリキ 皇后陛下ハ五月卅日午前七時五十分京都ヲ發駕ラセラレ皇后宮大夫子爵香川敬三皇后宮亮三宮義胤等ノ諸氏及ヒ女官數多供奉シテ翌三十一日午後二時新橋停車場ニ着御而シテ還宮在ラセラル凱旋當日ノ盛況ハ能ク筆ノ及フ所ニアラスト雖モ此ニ其一斑ヲ述レバ市街家トシテ日章ノ国旗ヲ掲ケサルハ莫ク新橋停車場ハ場外廣庭ニ白砂ヲ鋪キ其出入口及ヒ柱ハ総テ檜葉ヲ以テ之ヲ包ミ點綴スルニ金蓮花ヲ以テ天井ト四壁トハ国旗ヲ懸垂シ紅白紫ノ幔幕ヲ張り場外ニハ東京有志者ノ設ケタル斑竹ノ装額ニ夏菊花ヲ以テ奉迎聖駕ノ四字ヲ形ハシ高サ十六間幅十間ノ大緑門ヲ造リ大国旗ヲ交叉セリ〔中略〕沿道左右出テ、奉迎スル者幾萬人ナルヲ知ラス億兆謳歌萬歳ノ声天下ニ盈ツ宜ヘナリ皇軍向フ所枯ヲ挫クカ如ク国威斯ニ宣揚シ國版斯ニ開拓シテ 皇祖 皇宗ノ威烈ヲ發揚シ玉ヒ今ヤ 聖駕宮城ニ凱旋在ラセラル是レ寔ニ宇内萬國ヲシテ我帝國ノ尊嚴ト光榮トヲ欽仰セシムルニ足ル眞ニ千載ノ一大慶事ナリ其レ孰レカ 聖徳ヲ奉戴慶祝セサルベケンヤ寶祚ノ隆天壤ト窮マリナシ嗚呼盛ナル哉（亀井 664-67）

〔5月30日〕 天皇陛下午後二時新橋御着にて還御ありたり（昨日京都御發輦

静岡一泊)。到る処に緑門を造り、道傍には各自団をなして拝迎し士民歎喜熱誠に奉迎せり。(原 224)

[5月30日]・主上東都に還幸 即ち凱旋の当日なれば戸々国旗を出し軒提燈など場末の賤かふせやまていたりてうらや住居するものは手遊やにうる五厘国旗など軒にさしたるもミゆ 着輦ハ午後二時成りといふ 十時ころ安井〔てつ〕君来る これより高等女子師はん校一同と共に奉迎二趣かんとするを野々宮君こゝより 参り給はんとなりしかは誘ひに來たりしといふ いな君ハおはさずといふにさらは又のちに参らんとていそぎて出つ〔正午過より花火の音絶まなし〕〔中略〕てつ子のもとより使ひあり 止ミかたき客ありて供に萬歳を祝さんなどありて出かたければとなり さらはせんなしとて野々宮にハタめし出しなとしてこゝなるひとへものかして帰す(樋口 437)

[5月30日] 天皇は昨年の新暦九月一三日以来、〔日清戦争の〕戦場に少しでも近いところへと、広島を行在所としておられたが、きょう東京にお戻りになる。市内でははなやかで立派なお迎えの準備がされていた。議事堂の近くには壮大な凱旋門が建てられ、さらに皇居からほど近い鉄道の駅と皇居の近くには、二つのアーチが建てられた。／ 市内のすべての学校は休みだった。わたしたちの神学校の生徒たちも、だいぶ前に旗を買うお金をいただきたいと言っていた。それできょう生徒たちは「神学校」と書かれた旗をもって、天皇が皇居へ向かわれる道路に立っていた。伝教学校と歌唱学校の生徒たちも同様である。信徒たちもまた「正教信徒」という旗をもって道に立った。わたしたちの女学校の生徒は外に出なかった。なぜならあまりの人出で危険だからだ。ほかの女学校も、小学校も来ていなかった。それでも、聞いた話によると、混雑のあまり、けが人が出たそう。二時から一斉に大砲の音が聞こえ、そのあとも花火の音が夕方までやむことがなかった。夕方からは、花火の音と輝きがすくなくとも一時まで続いた。／ 天皇を送るひきもきらぬ「万歳」の声が、駅から皇居まで続いていた。大群衆がその道路を端から端まで隙間なく埋めつくしていた。(ニコライ 第4巻9)

第3章 戦時にはそぐわない事実

[明治27年8月5日] ○昨四日夜カブキ座の演劇に夫人相携見物す。(田中 415) ※8月4日の時点では東京の各座は閉場しており、歌舞伎座も9月狂言の準備中だった。そのため田中の記載には疑問が残る。

[9月25日] 今夜今井氏と共に久しぶりに綾之助の義太夫をきく。美感にみたされたり。(国木田 221) ※当時の女義太夫人気については、寄席“不況のあひだにも女義太夫の席は割合におとろへず、どこもみな相當に繁昌してゐた。女義太夫は日清戦争前後から日露戦争前後にわたる十餘年が最も全盛の時代であつたから、戦争の影響を蒙ること多からず、依然として太功記十段目や三勝酒屋で客を呼んでゐた”(岡本 14)という記載が参考になる。

[9月27日] 昨夜は田村氏同道の積りにてアームストン曲馬を見物に出掛けたる処、田村氏不在なりしかば独り行きぬ。切符は国民新聞社の通用切符なるが故に費用はいらず。／今夜は今井君と共に行きたり。(国木田 222) ※イギリスのHarmston's Circusは明治25年に初来日し、明治27年に再来日していた。東京での興行は9月22日から両国の回向院で開始しており、独歩は興行開始から数日後に見物していたわけである。

[10月3日] 今夜義太夫をきく。／人は人の奴隷に非ざるかとは、梅川、忠兵衛の義太夫をきゝて打れたる感じ也。(国木田 230)

[11月6日] 戦争に従事し乍ら、吾殆んど無感覚なり(国木田 248)

[11月19日] 今朝ウオーツウオースの逍^{てん}羊^{じやう}遊^{ゆう}の最後の編を読みかけたり。(国木田 251) ※“逍^{てん}羊^{じやう}遊^{ゆう}”とはイギリスのロマン派詩人William Wordsworth畢生の大作である長編詩*The Excursion* (1814) のことで、“最後の編”とは第9巻(Book Ninth) “Discourse of the Wanderer and an Evening Visit to the Lake”のことである。なお、宮崎八百吉(湖処子)『ラルツァルス』拾貳文豪第4巻(民友社、明治26年)が既に「逍遙遊」として紹介していたので、独歩も湖処子の表記に従ったと見られる。

[12月12日] 停春氏の近松門左衛門を読みつゝあり。(国木田 260) ※塚越芳太郎(停春楼)『近松門左衛門』拾貳文豪第7巻(民友社、明治27年)のこと。11月4日に初版が発行され、同月11日には再版が発行されていた。

[12月22日] 今日午前ウオーズウオースのエキスカージョン最終の巻の読みかけを読んだり。多感多涙、憤恨痛悔措く能はざりき。(国木田 261) ※独歩を取り巻く状況(日清戦争)とワーズワースとの対比が余りにも鮮やか。なお、湖処子が(1814年版の前書きを基に)*Excursion*を“思想の一大殿堂となし、其前後の小品は、唯之れを環れる小神壇に過ぎず”とするワーズワース自身の評価を既に紹介していた(134)が、当書を巡る世評(毀誉褒貶)は出版当初から分かれていた。瞠目すべきことに、当書はピーグル号の航海から帰国した当時の若きダーウィンが2回通読した愛読書でもあった(ノラ・バーロウ編[八杉龍一・江上生子訳]『ダーウィン自伝』筑摩叢書197[筑摩書房、1972年] 71)。全体は“dull”ながらも“自然の感化力”を語り(偉

大な詩人達に共通する)“人智”が存在する点を評価して“a great joy”と賞賛したエマーソン(“Thoughts on Modern Literature,” *Dial* [復刻版、本の友社、1999年]第1巻第2号、1840年10月)と同様に、感激した独歩も賞賛派の一人だったというわけである。

[明治28年2月12日] 此の船ニぶらりとして居て読む本も無く至極體屈(黒田 376) ※第4回内国勸業博覧会(京都市岡崎公園、明治28年4月1日-7月31日)に出品された黒田の裸体美人画《朝妝》が問題化する2か月前の状況。

[4月21日] 今日も芝居見物に暮らせり。(正岡・89)

[5月4日] 正岡常規来り訪ふ俳諧の事を談ず(森 250) ※興味深いことに、このことを子規の方は日記に記していない。

結論

日清戦争期の諸日記の共通関心事が戦況そのものであったことは当然で(その逆に8月7日に「義勇兵に関する詔勅」で禁止された義勇兵運動などは共通の無関心事だったようである)、学海日記はその典型だが、女性同士でも花溪日記と一葉日記とでは戦況の受け止め方が対照(熱狂と冷静)的に異なる。戦況の受け止め方には特徴が現れている(石井はキリスト教徒的、上田は経済家的、尾崎・原は官僚的、独歩は詩人的、黒田は画家的、近衛・田中は議員的、山本は教員的、学海は学者的など)。

興味深いのは、戦争の渦中でも、戦争から明らかに距離を置いた行動が見られることである。例えば、(1)9月25日と10月3日(近松門左衛門作の浄瑠璃『冥途の飛脚』)に独歩が義太夫を聴いていたこと、関連して12月12日に独歩が塚越停春楼『近松門左衛門』を読んでいたこと、(2)9月26-27日の連日、独歩がアームストロン曲馬見物に出かけていたこと、(3)11月19日と12月22日に独歩がワーズワースの *Excursion* 最終巻を読んでいたこと、(4)従軍者が一時的に心理的空白を覚えていたこと(10月31日に鷗外が無聊を感じていたこと、11月6日に独歩が“殆んど無感覚”だったこと、2月12日に黒田が退屈を感じていたこと)、(5)(内容に関わりなく)〈歌舞音曲〉・〈歌舞歓楽〉としての芝居を見物していたこと(8月4日に田中、9月25-26日と11月18日と12月6日に学海、12月10日に黒田、4月21日に子規)などである。

このような事実の背景を解明するには、各日記執筆者の環境や性格・心理を精査しなければならず、本稿ではそこまでは行ない得なかったが、日清戦争期の諸日記が公的(表面的)な正史と相對峙する内容を含むものであることは確かなようである。